長崎歴史文化博物館 教育実践報告書

－アウトリーチ活動－

2005～2014

遠隔授業

展示室での資料解説　　長崎歴史文化博物館

スクリーンを通して授業を受けるようす　　平戸市立度島小中学校

ワークシートに記入　　壱岐市立盈科小学校（会場:壱岐高校）

出張授業

やりとりをもとに授業を展開する　　長崎市立畝刈小学校

江戸時代の長崎港のようすは…　　佐世保市立江迎小学校

クイズ形式で楽しく学習　　長崎市立稲佐小学校

移動博物館（学校）

展示解説のようす　　長与町立長与南小学校

資料を間近で見学　　佐々町立口石小学校

唐人屋敷の生活は…　　佐々町立口石小学校

移動博物館（福祉施設）

折り紙を楽しむ高齢者　　ケアハウス稲佐の森（長崎市）

展示解説のようす　　アンムート櫻馬場（長崎市）

ひなまつりの料理を見学　　アンムート櫻馬場（長崎市）

長崎歴史文化博物館 教育実践報告書

－アウトリーチ活動－

2005～2014

ごあいさつ

長崎歴史文化博物館
館長　大堀　哲

博物館は、いまや貴重で価値ある「モノ」を見せるところから、人々に未知の「モノ」や「コト」と出会わせることによって、新たな知を発見させ、成長させてくれる場と認識されるようになっております。そうした意味での博物館教育は、博物館活動の中核であり、究極の目的であるといえると思います。私は長崎歴史文化博物館運営の最重要方針を、博物館教育の充実発展を図ることとしております。そのことをうけて教育普及グループが取り組んできたこれまでの成果は、①学校と博物館との連携プログラムであり、②地域社会との連携協働の観点からボランティア活動の実践であります。それらは、既に報告書として作成し、参考に供してきました。

このたびまとめました「アウトリーチ活動」の実践報告書も、当博物館の教育活動の重要な柱として継続的に実践してきたもので、その第3弾に当たります。

博物館に来館しない人々のなかにも、広報、出版活動によって、そして特に最近はインターネット、フェイスブックなどで潜在的にあった興味や関心を刺激されて、博物館の利用へと顕在化するケースは増えていると思います。これに対して、アウトリーチ活動は、基本的には新しい利用者を対象とするものといえるでしょう。欧米とは異なり、社会的弱者（マイノリティ）に対する意識が殆どないわが国の場合、博物館のアウトリーチ活動は学校と連携した出張授業や移動博物館として、物理的に来館するのが困難な学校の子どもたちを対象に、学芸員が資料を持参して展示の解説を行うというケースが少なくありません。勿論、博物館と地理的に悪条件ではない学校にも、博物館サイドから積極的に出かけて活動する例があります。私が静岡大学におりましたとき、浜松市博物館が生涯学習支援の観点に立って、子どもの頃から博物館に親しむ体験が重要であるとして、移動博物館の実施状況を学生に見学させたことがあります。展示用キットを学校に持参して展示したり、土器づくりや野焼き、縄文クッキーづくりなどの体験活動を通して、博物館活動に対する理解を深めておりました。こうしたアウトリーチ活動が、将来、博物館を理解する来館者へと育てるうえで大きな効果があることは間違いないと思います。

当博物館のアウトリーチ活動も、学校だけではなく福祉分野にも幅を広げておりますし、さらに内容や方法の研究を図りながら、今後より充実したプログラムを実施して参りたいと思います。出張授業や移動博物館が契機となって、子どもたちにもっと多くの実物資料に触れさせたいという教師の意欲が高まり、来館する学校が増えてきているのは有難いことだと思っております。

まだまだ課題はありますが、一歩一歩着実に課題に向かってチャレンジしていきたいと思います。どうぞ本報告書につきまして忌憚のないご批判、ご意見を賜ることができれば大変幸いでございます。

2015年3月

目　次

長崎歴史文化博物館におけるアウトリーチ活動
社会的役割を拡大していくために …… 4

1. 遠隔授業について …… 9

2. 出張授業について …… 21

3. 移動博物館について …… 37

4. 貸出教材について …… 53

資料編 …… 61

長崎歴史文化博物館におけるアウトリーチ活動
社会的役割を拡大していくために

教育普及グループ
リーダー　竹内　有理

はじめに

長崎歴史文化博物館における教育普及事業の取り組みについて、これまで２冊の教育実践報告書を刊行した。一つめは博学連携に関する取り組みについて、二つめは地域連携事業としてのボランティア活動の取り組みについて取り上げた。３冊目となる本報告書では、当館の教育普及グループが開館後９年間にわたって実施してきたアウトリーチ活動について、その成果をまとめたものである。今年で開館 10 周年という節目を迎えるにあたり、これまでの活動を振り返り、自己点検することにより、今後の更なる展開を考えるための足がかりとしていければと思う。

1.　アウトリーチ活動の定義と意義

アウトリーチ活動は今では博物館・美術館で幅広く実践され、用語としても定着してきたといえる。アウトリーチ（outreach）という英語は直訳すると「手を伸ばす」という意味になるが、社会福祉の分野で広がった手法だという。公益財団法人日本女性学習財団の定義によると「支援機関が通常の枠を超えて手を差し伸べ、支援を届ける取組の意味で用いられてきた。困難を抱えながらも支援の必要を自覚していない、相談意欲がない、支援拠点に足を運ばない人の場合、従来の施設型支援から取りこぼされることが多い。アウトリーチはこうした潜在的なニーズとつながる手法として開発された」とある[(1)]。

その後、博物館・美術館、文化ホール、大学等、様々な分野で「アウトリーチ」という用語を使った活動が行われている。「潜在的なニーズとつながる手法」という意味で、博物館や文化施設が行う教育普及活動全般を指す場合もある。財団法人地域創造は、アウトリーチを①出張コンサート・展覧会等の「地域派遣型事業」、②子どもや青少年、親子向けに企画された普及事業、③ギャラリートーク等の芸術鑑賞事業、④教育普及を目的とした展覧会事業、⑤実技指導や専門家育成を行う事業、⑥専門的知識を学ぶ講演事業、⑦施設の裏側を見学・体験する施設体験型事業の７つに分類している[(2)(3)]。

この定義を博物館に当てはめると、博物館で一般的に行われている教育普及事業のほぼすべてが含まれることになるので、本報告書ではアウトリーチ活動の定義をもう少し限定して解釈したい。つまり、文字通り博物館という施設の外で（out）、そこにいる人々に対して行うサービスと捉えることとする。

博物館に来てくれる人は、何らかの目的や興味を持って足を運んでくれる人たちである。それらの人々に対して、様々な教育プログラムを提供することは、アウトリーチという言葉が定着する前から博物館で広く行われてきた。それに対してアウトリーチという概念がめざそうとしているのは、

「潜在的なニーズ」に向かって、博物館という物理的な枠を超えて、そのサービスをより多くの人々に提供することにある。博物館に留まって来館者を待つ受身の姿勢ではなく、博物館からまちに出て行く積極的・能動的な姿勢が求められる。そのような取り組みにより、博物館は地域社会とのつながりをより深めていくことができるだけでなく、教育や福祉、まちづくりなどの分野における地域的課題に応えていくこともできる。

本報告書ではアウトリーチをこのように捉え、当館で実施してきた活動を振り返ってみたい。

2. アウトリーチ活動の現状

本報告書では主に学校向けのアウトリーチ活動を中心に、提供しているサービスを手法別に紹介しているが、ここではサービスを提供する場所と目的別に活動の概要について解説する。

1）学校におけるアウトリーチ活動

①出張授業と移動博物館

学校向けの教育サービスを充実させることは、地域住民（子どもを含む）への学習支援を目的とする博物館にとって重要な使命の一つであることは言うまでもない。博物館に来館した学校に対して、展示解説やテーマ学習、体験プログラムなど様々なサービスを提供している。数の上では、来館した学校に対するサービスよりはるかに少ないが、博物館から学校に出向いて行う出張授業や移動博物館も学校向けプログラムの一つとして実施している。出張授業は年間で 5 から 9 回、移動博物館は 3 から 7 回実施している。

出張授業は授業のテーマや目的にあわせて、博物館で作成した教材（当館所蔵の複製資料、長崎版画の体験キット、スライド等）を使って、教育担当の学芸員が授業を行う。移動博物館は複数の体験キットや屏風、絵画、文書などの複製資料を学校の体育館などに展示し、博物館の展示見学を疑似体験してもらいながら、展示されている資料を学芸員とともに読み解いていく内容となっている。移動博物館は対象となる生徒数に応じて、半日から1日の時間帯で実施している。移動博物館と出張授業を組み合わせたプログラムを行う場合もある。

長崎県内には小学校が 375 校、中学校が 196 校、高等学校が 85 校、特別支援学校が 16 校ある（平成 25 年度長崎県教育基本調査より）。出張授業や移動博物館は学校の要請に応じて行っているが、原則、来館が難しい遠方の学校を対象としている。また、博物館を使った授業のあり方について検討する「パートナーズプログラム」のメンバーになっている教員が所属する学校に対しては、要請があれば優先的に出張授業や移動博物館を実施している。本プログラムに参加している教師とは日頃から密に連絡を取っているので、出張授業や移動博物館の目的や授業のなかでの位

置づけも事前の打合せを通じて博物館の担当者と教師との間で共有されているケースがほとんどである。博物館を実際に見学する前にこうした出張授業や移動博物館を行うことも多い。

②遠隔授業

長崎県は離島を多く抱えているという特徴が挙げられる。陸続きでないため、長崎市内に立地する博物館までの移動が必ずしも容易ではない。そのような事情もあり、博物館の設置者である長崎県は教育サービスの離島対策の一環として通信回線を使ったテレビ会議システムを導入した。博物館が開館した 2005 年に導入されたシステムで、まだカメラ付きのパソコンやテレビ会議なども普及していない当時としては最先端のシステムだった。この最新システムを用いて博物館と離島にある学校とを通信回線でつないで遠隔授業を行っている。遠隔授業を実施する学校に本システムを設置しなければいけないことと、通信回線の環境整備が必要なことから、異なる地域で頻繁に実施するのは難しい。したがって同じ地域で年2回の頻度で遠隔授業を実施している。これまで壱岐高校、小値賀小学校、小値賀中学校、対馬高校、度島小中学校と実施した。

教室に設置されたスクリーンには博物館の展示室が映し出される。そして画面の向こう側にいる学芸員とリアルタイムでやり取りをしながら学習を進めていく内容になっている。画面を通してではあるが、遠隔地にいても学芸員と生徒がお互いの反応を確かめながら、双方向に学習を進めていくことができるのが利点である。

以上見てきた出張授業、移動博物館、遠隔授業は学校向けのサービスの一つとして行っているもので、学校での学習を補完する教育を主たる目的とした活動といえる。

2）福祉施設におけるアウトリーチ活動

頻度としては前述した学校向けの移動博物館の実施の機会のほうが多いが、高齢者福祉施設においてこれまでに 4 回移動博物館を行った。福祉施設での移動博物館の展開を模索していたときに、新聞紙上を通じて博物館の移動博物館サービスの実施を呼びかける記事を掲載してもらったところ、早速、複数の高齢者福祉施設を運営する民間の企業から申し込みがあり、実施したのがはじまりだった。移動博物館は来館が困難な人々を対象にサービスを提供するのが目的であるが、距離的に困難な場合だけでなく、体が不自由で自由な外出が制限されている人々も「来館が困難な人」の対象となる。そのような人々にこそ、移動博物館の果たすべき役割があるともいえる。

どのような内容の移動博物館にするかは、福祉施設の担当者と話し合いを重ねながら決めていった。高齢者を相手に行うので、学校で行う移動博物館の学習目的とは当然異なってくる。高齢者の記憶や思い出に何かしらの刺激を与えられるように、長崎の古写真や季節の伝統行事のときに食べる郷土料理のサンプルなどを展示物に入れるよう配慮した。また折

り紙や長崎版画の製作体験など、手先を使う体験も意識的に取り入れた。移動博物館の内容を決めるうえで、日頃から高齢者と接している福祉施設の職員の意見やアドバイスは大変参考になった。

このような福祉施設におけるアウトリーチ活動を通して、博物館が地域の福祉にも貢献できる可能性があることを確認することができた。

3）広報宣伝活動としてのアウトリーチ活動

上記の学校向けのアウトリーチ活動は教育を目的とするもの、福祉施設でのアウトリーチ活動は福祉的課題への対応を目的としているのに対し、博物館の存在や活動を広く知ってもらう広報宣伝を目的としたアウトリーチ活動もあることを付け加えておきたい。

定期的に実施しているものとしては、市内の大型商業施設でのワークショップイベントがある。映画館、飲食店、ファッション関係の店舗、スーパー等が入る商業施設のフロアの一角にスペースを提供してもらい、そこで主に子どもが楽しめるようなワークショップを実施している。博物館のPRや企画展のPRを目的としているため、コレクションや企画展のモチーフをテーマにしたペーパークラフトや塗り絵などの体験プログラムを行っている。商業施設にとってもお客様へのサービスの向上や施設の活性化という目的があるため、場所代等は払っていない。博物館と同施設の連携イベントとして実施している。

商業施設での広報活動の様子

博物館のPR活動の一環として、地元のイベントと連携した取り組みも行っている。毎年ゴールデンウィークの時期に行われる長崎帆船まつりというイベントがある。そこで博物館のブースを出し、博物館のPRとミュージアムショップのグッズ販売を行っている。これについては出店料を払っているので、宣伝活動の一環と位置づけるほうがふさわしいかもしれない。博物館の外に出て行って行う活動という意味でアウトリーチ活動の一つとして触れておく。

なお、本報告書の本編で遠隔授業と出張授業、移動博物館の取り組みについては詳細を報告しているが広報宣伝活動としてのアウトリーチについては触れていない。また、学芸員が公民館などの公共施設や研究会・学会等に依頼されて行う講演会や講座等については、主体が博物館ではないことと、館外における個人の研究活動の一環として捉えられるため、アウリーチ活動としては扱わないことにする。

3.　今後の課題と方向性

長崎歴史文化博物館におけるアウトリーチ活動を対象とする相手(場所)と目的別に見てきた。いずれも博物館の外で行う活動という点では共通している。博物館がこれらの活動を行う意義としては、次のことが挙げられる。一つは博物館が持っている教育的役割をより多くの人々に提供できること、二つめに博物館の存在を身近に知ってもらう機会を作れること、三

つめに博物館が立地する地域以外の人々にサービスを提供できること、四つめに潜在的な利用者を開拓できること、などが挙げられる。アウトリーチ活動を行うにあたり、これらの意義について職員が共通認識を持つことが重要である。

一方、個々の活動について課題も抱えている。学校に対する出張授業や移動博物館をどの範囲まで行うべきかという問題がある。地理的に来館が困難な場所にある学校であっても、一度も博物館に来館しないという状況はどのように受け止めるべきだろうか。ともすると出張授業や移動博物館で博物館の利用が完結してしまい、学校にとっては便利なサービスで終わってしまうことはないだろうか。たとえ遠方にあったとしても、来館したいと思わせるようなきっかけにならなければ、出張授業や移動博物館の意義は薄れてしまう。

学校向けの教育事業として行っている遠隔授業については、費用対効果の面で課題が残る。設備投資のほかに、専門業者の出張費や技術費等、運営においても莫大な費用がかかるわりには、対象となる学校が離島の小さな学校の場合が多いので、十数名から数十名に留まってしまうことが多い。また、システム上のトラブルも少なくなく、授業の途中で通信回線が切れてしまうなど、不安定な要素が多分にある。安定性があり、技術的にも専門の技術者に頼らなくても実施できる小回りのきくシステムを検討してもいいのではないだろうか。さらに、教育的な視点から言えば、テレビ会議システムを使った遠隔授業という手法が子どもたちに与える学習効果についても十分に検証する必要がある。

今後、博物館が取り組んでいくべき課題の一つとして、福祉分野との連携がある。超高齢化社会に突入しつつある今、高齢者福祉に博物館が果たし得る役割が徐々に注目されてきている。福祉の専門家と協働して、博物館のコレクションを使った高齢者向けのプログラムを開発することもできるであろう。この分野においてはまだ未開拓であるが、今後積極的に取り組んでいきたいと思う。福祉的課題の解決に博物館が少しでも応えられるとしたら、博物館の社会的役割も増すに違いない。

参考文献

（1）公益財団法人 日本女性学習財団　http：//jawe2011.jp/index.html
（2）財団法人地域創造『アウトリーチ活動のすすめ－地域文化施設における芸術普及活動に関する調査研究』2001
（3）的場康子「アウトリーチ活動の意義・課題についての一考察」『Life Design Report』2003.2　pp.26-35

1. 遠隔授業について

遠隔授業の概要について

教育普及グループ
主任研究員　出口　幹子

1. はじめに

長崎歴史文化博物館では、多くの児童・生徒が博物館の資料にふれる機会をつくり、長崎の歴史や文化への理解を深めることを目的に、来館が困難な遠隔地の学校と博物館とを通信回線を使ったテレビ会議システムで結ぶ「遠隔授業」を、開館時の平成17年度から実施している。

遠隔授業では学校にいながら、遠く離れた博物館とリアルタイムで交流することができる。つまり教室にいる子どもたちに博物館の雰囲気を伝え、展示を見ながら専門的な解説を行いつつ、授業中に子どもたちから生まれた疑問や気づきについて答えることができるなど、博物館と学校で双方向に会話のキャッチボールをしながら授業ができることが、大きな特徴の一つといえる。

開館時の平成 17 年度から平成 19 年度までは長崎県立壱岐高等学校、平成 20 年度・21 年度は壱岐高等学校と壱岐市立盈科小学校の 2 校とそれぞれ遠隔授業を実施した。そして平成 22 年度から 24 年度までは小値賀町立小値賀小学校と小値賀中学校、平成 25 年度からは平戸市立度島小中学校を対象に遠隔授業に取り組んでいる。

2. 遠隔授業のシステム

遠隔授業の一連の流れについて述べたい。遠隔授業の実施校が決定すると、学校に新規で遠隔授業専用の NTT 回線を設置する。これは遠隔授業で学校の既存回線を使った場合、既存回線に何らかの支障を来すことが懸念されるためである。

回線設置後には、遠隔授業で使用する機材一式を持って博物館職員と博物館が委託した映像機材専門のスタッフが学校に入り、新規回線を使って博物館と学校の教室を結び、通信環境の確認をおこなう。

遠隔授業ではインターネット回線を使っているが、離島の場合 ADSL 回線の学校も多く、さまざまな要因で通信環境トラブルも発生するため、通信機材については専門のスタッフに委託している。

遠隔授業の実施前日には博物館の展示室と学校の会場を結び、遠隔授業のリハーサルをおこなっている。展示室は資料保護の観点から照度を落としているため、教室のスクリーンでは映像が暗く、展示室の様子や資料が見えづらい事も多くある。

事前のリハーサルでは、展示室の雰囲気を子どもたちにより鮮明に伝えられるように、スポット照明での明るさの調整や、解説者の音量・立ち位置についても入念な確認が必要である。

遠隔授業終了後、翌年も同校で継続する場合には映像機材は学校で保

管するが、対象校が変更する時は、機材は一端博物館に持ち帰り、遠隔授業専用にひいたNTT回線も撤収をしている。

これら遠隔授業の一連の作業にかかる全費用は博物館が負担している。また実施校は県内の対象校に募集をかけるのではなく、学校に直接依頼をして実施する形式をとっている。

壱岐高等学校のようす

3. 授業のようす

授業案は学校の要望を聞き、博物館の展示内容や施設を用いて出来る授業案を作成し、学校に提示する。学校が実施時期や対象学年にあわせて選択した授業案をもとに、教科書や対象となる地域と長崎との関連性を念頭におきつつ、詳細な授業案を作成していく。

これまでに「長崎貿易～オランダ貿易と中国貿易」「長崎奉行とキリシタン」「ヨーロッパとの出会いから鎖国まで」、修学旅行で訪れた長崎と博物館の資料を結び江戸時代の長崎について学習する「長崎タイムカプセル」など常設展示室の展示資料と教科書に掲載される事項を関連させた授業を中心に実施してきた。

また企画展が対象校地域と関連する場合には、前半に博物館の役割や学芸員の仕事である資料調査について学び、後半では企画展の資料を読み解くことで、子どもたちの暮らす地域の歴史的特徴や長崎との関連性について学習するといった内容で、「モノから歴史を語る～邪馬台国への道・一支国を探る」や、「博物館の仕事と中国の交流」といった授業も展開してきた。

盈科小学校（会場：壱岐高校）

授業時の博物館職員と学校の教員との役割分担については、壱岐高等学校との遠隔授業では高校の授業形式を踏襲し、教科書に記述された内容の進展を目指した授業であり、実施前に充分な協議や打ち合わせがおこなわれていたため、授業実施中は学校側の進行役は教員が担い、博物館では教育担当者が授業を進め、歴史や資料の説明は研究担当者がおこなうという三者の役割分担が成り立っていた。

しかし対象が小中学校にかわったことで、授業内容も教科書の発展的な学習として、資料を読み解き、体験を取り入れながら歴史への興味関心を高めるものに変化していった。

これは小中学校の通常の授業形式とは異なっているため、学校側にも博物館職員を派遣し、教員と共同で進行を担うようになった。また博物側では普段から小中学生を案内することが多い教育担当者が進行役と解説の両方を兼ねる形に変わっていった。この新たな役割分担によって博物館で授業をおこなう教育担当者は遠く離れた教室の雰囲気を教員や博物館職員を通じて、より把握することができるようになり、円滑な授業展開へとつながっている。

4. 評価と課題

遠隔授業では、リアルタイムで交流できる利点を生かし、学校にいなが

小値賀小学校のようす

ら博物館の雰囲気を伝え、博物館でしか見ることができない資料や専門の人材を効果的に使うことで新たな教育サービスとして確立しつつある。

しかし、対象となる児童・生徒にとって、長崎市はあまり身近な場所ではないため、教科書に掲載される江戸時代の長崎についての興味や関心はそれほど高くはない。そのため授業の中に子どもたちの暮らす地域との関連性を多く取り入れたり、子どもたちが日常に使う教科書の事項をさらに詳しく見ていくなどの博物館の展示と子どもたちをつなぐ更なる授業の工夫が必要となってくる。

子どもたちが本授業を身近な学習として捉えられれば、子どもたちのこれまでの経験や知識をつなげて、遠隔授業が単なる一過性のイベントではなく、学びの場として成立するのではないだろうか。学校が希望する内容と展示をいかに摺り合わせていくかがが今後の課題としてあげられる。

そして費用面においては回線の設置や、職員や通信スタッフの派遣などの多くの費用が発生する反面、対象者が少ないという問題もあるが、授業を地域の人びとにも見ていただくことで、対象を広げることで、地域の歴史の再認識にもつながる可能性も秘めている。

現在、遠隔授業では主に博物館が情報を発信しているが、複数回の活動を利用し、子どもたちが郷土学習の発表の場としての情報を発信したり、一度の実施校を２校に増やし県内の他地域の歴史も合わせて学ぶことで、自分の地域と他地域の歴史を比較して学ぶことも出来るため、長崎の多様な歴史についての理解を深められるかもしれない。

遠隔授業ではさまざまな授業展開が可能である。学校のニーズを把握しながら、新たな授業展開についても今後検討をすすめていきたい。

遠隔授業の現状と課題　～技術的な視点から～

三和通信長崎株式会社
担当　内山　直樹

1. 通信環境（インフラ）について

本県では土地柄、遠隔授業の開催は離島になるケースが多い。

本島同士であれば概ね光回線が提供されており、通信帯域も確保でき、ハイビジョン画質での双方向通信が可能であるが、離島については光回線未提供の地域が多く、現状は ADSL 回線（モアスペシャル下り最大 44 ～ 47Mbps ／上り最大 5Mbps）を使用しており、NTT 中継局から遠隔授業対象校までの距離、時間帯によってはハイビジョン画質での双方向通信ができる帯域を保てず、通常画質での通信、回線状況によってはパケットロス等でブロックノイズが出るケースもあった。

また、対馬での開催時に CATV（光回線）使用時に時間帯によっては一時回線断となるケースもあった。

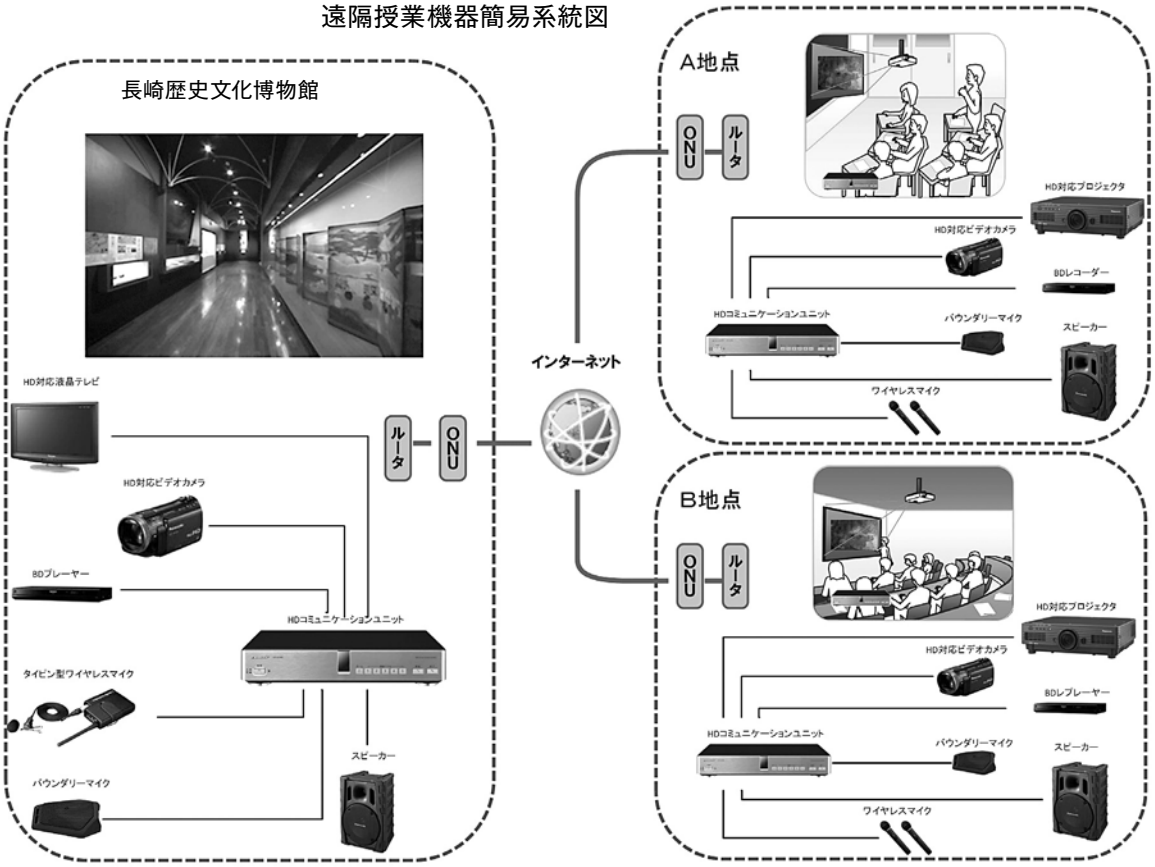
2. 通信環境（VPN）について

本遠隔授業では長崎歴史文化博物館と遠隔授業対象校を前述のインフラ回線を用いて通信している。ただし、TV 会議システムの特性上、①各拠点に固定 IP（グローバル）アドレスを契約する。②専用通信回線を契約する。③ VPN を構築する。のいずれかが必要で①と②についてはランニングコストが高額になり、現在は既存のルーターで③インターネット VPN を構築して運用している。コストは①、②と比較して抑えられているが、遠隔授業対象校が変わるたびに VPN 構築設定をやり直す必要があり知識を持った情報処理技術者が必要である。

3. 機器写真について（遠隔授業対象校用）

4. 遠隔授業系統イメージについて

遠隔授業機器簡易系統図



5. 今後の課題について

大学・高校等で行われる通常の講義型遠隔授業と違い、収蔵品を高画質で鑑賞する必要がある博物館での遠隔授業は回線帯域の確保及び専用端末の導入が最低限必須である。

回線帯域の確保について遠隔地では現状、光回線契約が難しいことからADSL契約となる為、対象候補校は事前に回線状況等の調査が必要である。

また、専用端末についても機能面は日進月歩であり、メインとなる通信機器、TV会議端末は定期的な更新が必要と思われる。

事例

平戸市立度島小中学校との遠隔授業について

教育普及グループ
主任研究員　出口　幹子

1. はじめに

遠隔授業は博物館が単独で行う事業で対象数が少ないため、積極的な周知活動が充分に計られているとは言えない。そのため学校現場で理解を得にくいこともあり、小値賀町での遠隔授業が終了し、次年度の実施校について懸念を抱いていた頃に平戸市立度島小中学校の迎和人校長とお会いする機会を得た。迎校長は小値賀小学校で遠隔授業に関わっていただいた経緯があるため、実施を打診したところ快諾いただき、平成２７年度までの３ヶ年計画で実施の運びとなった。

２．テーマの設定

県北の平戸市北部に位置する度島町にある平戸市立度島小中学校は小中学校併設校である。平戸長崎間は移動時間が３時間ほどかかるため、学校行事では小学６年生の修学旅行で長崎を訪れる機会が多いという。

事前打ち合わせで遠隔授業の要望を学校に伺ったところ、平戸に関連した内容でという回答があった。平戸はフランシスコ・ザビエルが布教に訪れた場所であり、ポルトガルやイギリスやオランダとの貿易港として繁栄した歴史がある。今回の遠隔授業では教科書との連動を念頭に置きつつ、日本史の中での平戸の位置づけや平戸と長崎の関連性も注目した授業展開を目指した結果、「南蛮貿易から鎖国まで」をテーマに、中学２年生とは以下の流れで授業を展開した。

展示室の入口から

３. 授業の様子

①導入

遠隔授業がリアルタイムで双方向通信できることを学習するため、館内の様子や博物館職員が子どもたちの様子を確認する映像をモニターで写した。

②「アジア図」「日本図」を読み解く

「アジア図」をもとに大航海時代、ヨーロッパ人が日本をどのようにとらえていたのか資料を基に読み解く。また「日本図」では、現在の日本地図と比較しながら、子どもたちの気づきに答える形で解説する。特にFirand（平戸）の記載に注目する。

③南蛮貿易の様子を知る

南蛮屏風（左隻）について質疑応答を繰り返しながら読み解き、南蛮貿易が平戸で行われていたことにも付け加えて解説する。次に南蛮屏風（右隻）のパズルを班ごとで組み立て、疑問や不思議に思うことを班内で共有した後に発表。子どもたちの気づきは板書する。

④南蛮貿易の様子を解説

子どもたちの気づきを系統立てて解説しながら、南蛮貿易について解

説。南蛮屏風に描かれた教会や宣教師の様子からキリスト教の布教についても触れる。

南蛮貿易関係の史跡や伝統菓子、ザビエルの布教など、平戸と南蛮とのつながりも紹介。またルイス・フロイス『日本史』の記述をもとに当時の「度島」についても触れる。

⑤朱印船貿易を学ぶ

朱印状（複製）や朱印船図を読み解きながら、日本人も東南アジアに貿易に行っていたことを知る。また平戸からも朱印船が出ていたことも伝える。

⑥キリスト教の禁教と鎖国について

南蛮屏風（右隻）を見ながら、キリスト教の布教について再度確認したあと、キリスト教の取締りについて、踏絵図や踏絵（複製品）をもとに禁教について学ぶ。また宗門改帳も紹介する。

⑦江戸時代の長崎について

「長崎港之図」を読み解きながら、出島や唐人屋敷について知ることで、鎖国体制成立後の長崎の様子を確認するという流れで授業を行った。

町屋の中で解説

小学６年生対象の授業では、②を除き、④の解説のあとに学校に持ち込んだ貿易品の体験キット（鮫皮や薬）に触れたり、貿易品の値段を当てるクイズをするなど体験要素を多く付け加えている。また朱印船貿易や宗門改帳の紹介は小学校では行っていない。

中学生からは「教科書であまり詳しく学習しない範囲を、時間をかけて詳しく学習できたので、良く分かりました。」「ICT 授業ははじめてで少し驚きました。ICT を使っての授業はすごく分かりやすくて楽しかったです。」小学生からは「歴史博物館を見て、僕はここに行けるのかなと思いながらわくわくしました。」という感想が寄せられており、歴史への興味や関心を高めるという点については一定の評価を得ているが、平戸の歴史や長崎との関連性について、子どもたちにどれくらい伝わったのかは疑問が残る。対象地域の歴史をいかに授業内容に組み込んでいけるのかは当面の課題である。

4. 今後の課題

度島小中学校との遠隔授業は次年度が最後の実施となる。次年度に向けての小学校の課題は、授業の位置づけの再確認である。例年実施時期が６月上旬であり、江戸時代を未学習の時期であることや、一部の児童からは博物館の中をもっと見て欲しいという意見もあったため、修学旅行の事前学習を全面に打ち出した授業展開が有効かもしれない。また中学校では教科書や資料集を手元に置き、授業を展開することで、知識の定着化などの学習効果を高める事が期待される。

遠隔授業は複数年度実施することで学校と博物館との理解が深まり、それぞれの特性を生かした授業に進化させていくことができると考えている。複数年に渡り、遠隔授業についてご理解・ご協力をいただいている平戸市立度島小中学校にこの場を借りて深く感謝いたします。

平戸市立度島小中学校（中学2年生）での遠隔授業について

平戸市立度島小中学校
教諭　昌子　久志

①遠隔授業の様子

生徒は、小学校６年生の修学旅行で長崎歴史文化博物館を見学しており、興味をもって授業に入ることができていた。

中学1年時の歴史の授業で中世から近世は履修済ではあるが、資料を通して復習することができた。特に実物資料や郷土にかかわる資料を準備していただいたおかげで、意欲的に楽しみながら学習することができていた。生徒も学芸員さんとのやりとりを楽しみながら学習に取り組んでいた。

②遠隔授業の効果

遠隔授業の効果としては、学校にいながらリアルタイムで博物館の文化財をたくさん見たり、質問したりすることができたことである。特に近世史の中で、「平戸」が大きな役割を果たしていたことなどを、博物館の文化財を活用して、興味や関心、理解を深めることができた。

③課題と展望

課題は、移動や準備の手間である。事前準備が簡易化され、事前打ち合わせが容易になれば、学校と博物館の間でさらに深まりのある交流ができるのではないだろうか。

展望は、基礎・基本の定着である。今回の遠隔授業は、興味・関心を中心とする授業構成であった。生徒に興味・関心を持たせることが第一義ではあるが、知識の定着もはからせたい。遠隔授業で、ワークシートなどを活用するのも一考である。

興味を持って、作業に取り組んでいる

博物館の職員の方とのやりとりに集中

平戸市立度島小中学校（小学6年生）での遠隔授業について

平戸市立度島小中学校
教諭　江川　孝博

①遠隔授業の様子

初めて見るモニターや機材などを見て、興味をもって授業に入ることができていた。授業では間違い探しやパズルなどで意欲的に取り組めるよう工夫されており、楽しみながら学習することができていた。また、博物館にある「踏み絵」等の資料も授業の中で使用していただき、実物にも触れることができた。授業では、床にも集音マイクが設置されており、子ども達のつぶやきや小さな疑問などを拾いながら学習を進めてもらった。子ども達も学芸員さんとのやりとりを楽しみながら学習に取り組んでいた。

②遠隔授業の効果

遠隔授業の効果としては、学校にいながらリアルタイムで博物館の文化財をたくさん見たり、質問したりすることができたことである。博物館にある大きな文化財を運ぶことは困難であるが、遠隔授業ではモニターを通して学習することができる。また、専門的な指導を受けることで子ども達の興味や関心、理解を深めることができた。さらに、本校は修学旅行で長崎歴史文化博物館を訪問する予定があったため、博物館にも興味をもつことができたと思う。

③課題と展望

課題としては、博物館のスタッフの方の移動や準備があげられる。この準備が簡易化されると学校と博物館の間でさらに深まりのある交流ができるのではないだろうか。簡易化された機材になり、打ち合わせも簡単にできるようになると授業の中で手軽に活用できるようになると思った。

博物館の資料を見る子ども達

当時の貿易品のにおいを体験

2. 出張授業について

出張授業の概要について

教育普及グループ
主任研究員　出口　幹子

1. はじめに

長崎歴史文化博物館では県内学校を対象に、博物館見学の事前事後学習に役立つ学習機会の提供や、博物館から遠隔地に位置するため来館が難しい学校に対する教育普及活動として出張授業を実施している。

具体的には申込みのあった学校に所蔵資料の複製品や学習素材を持ち込み、1 時間から 2 時間程度の授業をする。授業のテーマは当館の展示や収蔵資料に沿った内容を軸に、先生方との打ち合わせに基づき決定していて、授業に際して担当教員にも子どもの発言を拾ったり、板書などの授業作りの支援をお願いしている。

2. 出張授業にむけて

出張授業は、学校現場に携わる先生方とともに学校教育の中で博物館を利用した授業のあり方や博物館での学びを深める取り組みについて考える博学連携協働事業「協力校・パートナーズプログラム」参加者を対象に、平成 21 年度に長崎市内の 4 小学校を対象に実施した。平成 22 年度からは対象を県内学校に広げて事業を展開しており、試行期間から現在までで、60 校（小学校 34 校、中学校 15 校、高等学校 9 校、特別支援学校 2 校）で実施をしている。

パートナーズ参加者を対象に実施したのは、博物館職員はこの時点まで教室で授業を任される経験は少なく、授業の進め方や子どもたちの発表方法、黒板の使い方など不慣れなことが多く、授業の内容よりもそうしたことに出張授業の難しさを感じていた。

試行期間中の出張授業では、博物館職員がおこなう説明の中で、子どもたちに言葉だけでは伝わりにくい場面では板書したり、授業の切替えの場面では子どもたちの意識を向けさせたりするなど、担任の教員が博物館職員と子どもたちをつなぐ役割を担うことで、授業がとてもスムーズに進行した。

この実践を通して、出張授業における博物館職員と教員との役割分担がイメージできた。事前に学校に上述の内容について依頼することで、一つの授業を博物館職員と教員で作り上げることができる、つまり授業をデザインする具体的な手法を見つけられたことが収穫であった。

また試行期間中におこなった出張授業では、事前打ち合わせで授業を通して教員が子どもたちに何を見せたいのか、何をつかませたいかなど、授業のねらいや期待する効果を両者が把握する重要性についても議論があった。博物館の資料から読み取れる情報は多岐にわたるため、何をこどもたちに伝えたいのかによって伝える情報は異なってくる。出張授業の狙いが共有されていない場合には、どの情報を伝えると学習目的に合うのか探りながら話すため、解説時に使う語彙の難しさや情報過多などの問題が

発生することもあり、出張授業をおこなった意義自体も薄れることになりかねない。事前打ち合わせを綿密におこなうことは、より効果的な出張授業につながるように感じている。

3. 授業のようす

小学校では６年生を対象に社会科の発展的が学習として、江戸時代の長崎、特に出島についての要望が多くあがる。授業では円山応挙が描いたとされる『長崎港之図』をみんなで見ながら、出島の形や大きさ、名前の由来などを読み解き、長崎に貿易に来た中国人が暮らす唐人屋敷や、中国貿易の荷物を保管した新地之荷倉（現在の新地中華街）について学ぶ事で、より江戸時代の長崎について理解を深めることができる。

子どもたちの出島への関心が高まったところで、「出島ではオランダの人たちはどのような暮らしをしていたのだろうか?」を課題として掲げ、「漢洋長崎居留図巻」という絵巻物のパズルを班ごとに配り、絵巻を完成させ、そこに描かれていることから生まれた気づきを発表する。最後には博物館職員がそれぞれの疑問や発見を拾いながら、絵巻の解説を加え、当時の出島でのオランダ人の暮らしをみんなで確認するといった授業である。

社会科と総合学習を組み合わせて、博物館見学と市内散策を合わせておこなう学校もある。出張授業では子どもたちに思いつく長崎の観光地を発表してもらい、観光地の中にはポルトガル・オランダ・中国といった国と関連した史跡があることに気付かせ、それぞれの国と長崎との間にどのような交流があったのかを博物館資料から読み解くことで、長崎が江戸時代を通して交流の窓口であったことを知るという授業も実践している。

小学校では複製品をもとに資料の読み解きを通して、歴史への興味関心を高めることを目的としているため、クラスごとで実施をしている。

中学校では総合的な学習の時間で長崎の文化財や史跡についての理解に深め、諸外国との交流の歴史と長崎が果たした役割やキャリア教育の一環として博物館の役割や学芸員の仕事について講義が多い。

4. 評価と課題

出張授業のテーマは学校との打ち合わせに基づき決定し、授業内容は繰り返し実践することで、内容を精査しており、特に小学校を対象にいくつかの実践例が出来上がっている。

出張授業は学校の現場で博物館の資料がどのように活用できるのか、また子どもたちが資料からどのようなことを読み解くのかを直接知る場所としても位置づけることもできるため、博物館側にとっても実施する意義は大きい。

普段とは異なる授業形式になる出張授業は一過性のイベントになりやすい面もある。学習の場として成立させるには、出張授業では授業のねらいや期待する効果を事前の打ち合わせを通して両者が把握することともに、出張授業を実施する時期を明確に見極める事で、子どもたちが得る教育的効果は大きく変わってくるように感じている。

事例 1.

活水高校における出張授業の取り組みについて
～「坂本龍馬と幕末長崎（2010年）」の出張授業を中心に～

教育普及グループ
研究員　一瀬　勇士

1. はじめに

長崎歴史文化博物館では、協力校・パートナーズプログラムに参加する学校教員を中心に出張授業や移動博物館の実施を行ってきた。しかし、そのほとんどは、小学校や中学校での連携が中心であり、高校生を対象とした出張授業の実践は少ない現状にある。そのような状況の中、協力校・パートナーズプログラムに参加し、積極的な博学連携を実践している活水高校の岩永教諭（社会科担当）の取り組みは、博物館にとっても大きな刺激となった。特に進学や就職を控えた高校生にとっては、住み慣れた故郷を離れる生徒もおり、そうした学生への郷土愛＝「アイデンティティ」を深め、郷土の歴史や文化に親しむ機会を学校と連携して博物館が提供できたことは、とても意義のあるものであった。

稲佐小学校での出張授業のようす

普段から博物館と接する機会が少ない高校生にとって、博物館の「ヒト」や「モノ」「情報」に触れることは、通常の学校授業とは違った視点から歴史を学ぶことができるのではないだろうか。

本報告では、これまでに実施した活水高校との出張授業を通して、博物館が得たものや課題となった点などを中心に述べていきたい。

2.「実録・坂本龍馬展」関連の出張授業の経緯

2010 年（平成 22）、NHK 大河ドラマ「龍馬伝」の放送により、長崎県内は龍馬フィーバーで、連日大勢の観光客で賑わい、街全体が龍馬一色であったことは記憶に新しい。

野母崎高校への出張授業のようす

長崎歴史文化博物館でも坂本龍馬に因んだ企画展やイベントを多数実施した。その中でも 10 月 2 日（土）～ 11 月 3 日（水祝）の 33 日間かけて実施した特別展「実録・坂本龍馬展」は、龍馬ゆかりの品々や有名な写真などを展示したことにより、多くの来館者が訪れる人気の企画展となった。

出張授業のきっかけは、企画展の主催者でもあった NHK 長崎放送局の担当者から、「長崎の子どもたちに坂本龍馬と長崎とのつながりを紹介できるような講座をつくれないか」という相談を受けたことであった。博物館としても企画展のＰＲ活動や未成年者層へ歴史理解を高める機会に貢献したいという思惑が一致し、公開出前授業「“ 龍馬が生きた時代 ” にタイムスリップ！」や「坂本龍馬と幕末長崎」というテーマを設定し、一般公募を行った。その結果、市内の小中高の学校から選考して、９月と 10 月に出張授業を開催することとなった。

活水高校への出張授業は、このような「坂本龍馬と幕末長崎」に対す

る関心の高まりの中で実現した取り組みの一つであった。当時は、高校生を対象とした出張授業の実績があまりなく、試行錯誤しながらの調整となった。岩永先生には、学校業務の忙しい合間を縫って、打ち合わせを行ってもらい、当日の流れや備品の確認、授業の進め方など一つ一つ丁寧に対応して下さったことを今でも記憶している。

3. 出張授業の内容と留意点

出張授業の開催に向けて、まず授業内容を「どのように構成し、生徒たちが楽しみながら理解を深められるか」が課題となった。岩永先生の助言を参考にしながら、次のポイントを発表するスライドに盛り込むこととした。

ラッセル館のスライド

刀の分解スライド

①歴史的背景や時代の流れを重視。生徒への問題提起を促す
　例：「幕末期の長崎になぜ、たくさんの外国船が来るのか？」
　　「開国によって長崎はどのようにかわっていったのか？」など

②文字よりもビジュアル資料を多用（博物館の画像資料を活用）
　例：大浦居留地の古地図を紹介。
　　→活水高校にも関わりの深いラッセル館を説明

③坂本龍馬に関わりの深いモノを使った授業（トピック1）
　例：坂本龍馬佩用の刀（レプリカ）

④坂本龍馬とお龍の関係を示す資料を紹介（トピック2）
　例：手紙、月琴、帯留

出張授業の対象の生徒は、2年A組英語科・普通科国公立進学クラス合同（20名）と3年C組普通科普通コース文系日本史選択グループ（28名）で、必ずしも全員が日本史や歴史地理に興味を持っている生徒ばかりではないため、専門的な内容にならないよう留意した。また、内容も学校の教科書では学ぶことはできない要素を盛り込みつつ、生徒が興味・関心を示すような龍馬とお龍の恋愛話といったこぼれ話を交えながら、龍馬の人物像や幕末期の長崎を紹介するように努めた。

3. 反省・評価

出張授業に対する生徒たちの反応を把握するため、授業終了後にアンケート調査を行った。このアンケート調査の分析からは、次のような結果が得られた。

	ⅡAクラス	ⅢCクラス	割合（%）
①ある	15	15	63.8%
②ない	4	13	36.2%
計	19	28	100%

表1　出張授業を受講した生徒の博物館の利用状況

例えば、「今までに長崎歴史文化博物館を訪れたことはありますか？」という設問に対しては、受講した生徒の30人（63.8%）が「ある」と回答している一方で、3年C組の生徒(28名）に限ってみると13名が「ない」

	ⅡAクラス	ⅢCクラス	割合（%）
①必ず見ている	4	0	8.5%
②時々見ている	3	1	8.5%
③たまに見ている	8	8	34.0%
④全く見ていない	4	19	48.9%
計	19	28	100%

表2　大河ドラマ『龍馬伝』の視聴状況

	ⅡAクラス	ⅢCクラス	割合（%）
①見に行ってみたい	19	23	89.4%
②特に見たいと思わない	0	5	10.6%
計	19	28	100%

表3　「実録･坂本龍馬展」への興味･関心度

授業のメモをとる活水高校の生徒

と回答している（表1）。また、大河ドラマ「龍馬伝」を見ている生徒の割合も２年Ａ組の生徒よりも３年Ｃ組の生徒の方が見ていないという結果が得られた（表 2）。この結果、２年生と３年生とでは、博物館や龍馬への興味・関心度に多少の温度差があったことがわかった。

しかし、出張授業に参加したことによって生徒たちの博物館や龍馬への興味・関心が高まったこともアンケート結果から得ることができた。博物館で開催していた「実録･坂本龍馬展」に「行ってみたい」と回答した生徒は、全体で 42 名（89.4%）であった（表 3）。なお、「機会があれば出張授業に参加してみたいと思いますか?」という設問に対しては、ほぼ全員が「はい」と回答していた。

また、岩永先生に取りまとめていただいた生徒たちの感想の中にも同様の意見が寄せられており、「授業を受けて興味が湧きました」「坂本龍馬を知ることができて良かった」など好意的な意見がみられた。ある生徒の感想の中には、「習い事があるため、龍馬伝はあまり見ることができなかったが、博物館や企画展には見に行きたい」といった意見もあった。

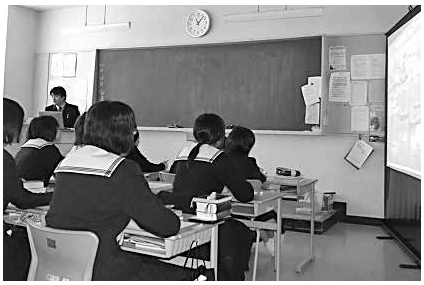
実際に授業を受けた生徒の中には、とても歴史好きな子がいる一方で、興味・関心は持っているが、習い事や部活動など学校以外の行事でなかなか博物館と接する機会に恵まれていない生徒たちの現状があり、特に就職や進学を控えた３年生にとっては顕著に現れているように感じられた。

活水高校での出張授業は、博物館に接する機会が少ない生徒たちにとって、「モノに触れること」「博物館のヒトに出会えること」が、かけがえのない貴重な体験となっていることを改めて感じる機会となった。この時の課題や反省が 2013 年の３月に実施した出張授業では活かされており、刀だけではなく貿易品（薬種や鮫皮）などのモノ資料を活用した授業も展開することができた。この活水高校での出張授業をきっかけとして、長崎版画体験の出張授業（2011 年～ 2014 年）を毎年、実施するまでに至っている。

特に 2014 年度に実施した出張授業（「長崎と唐人」「長崎版画体験」）は、台湾嘉義市の留学生 11 名も参加してお互いが学び合える環境の中で、グローバルコミュニケーションも取り入れた画期的な試みとなった。

出張授業の初回時は、お互いが不慣れであったこともあり、開催場所や準備、移動などに時間が掛かる場面もあったが、回数を重ねる毎に工夫が図られ、今では５号館のプレゼンルームで、生徒たちとより近い視線で出張授業を行えるようになった。今後も継続して活水高校との連携・交流を深めていくと同時に博物館を活用した授業を実践し、生徒たちに素晴らしい機会を提供されて来られた岩永先生に深く感謝いたします。

坂本龍馬佩刀体験



「坂本龍馬と幕末長崎」

「長崎版画柿渋説明」

「出張授業の学習効果 ～出会いから生まれる化学反応～」

活水高等学校中学校社会科
教諭　岩永　崇史

1. はじめに

2010 年度から長崎歴史文化博物館パートナーズプログラムに参加させていただき、研修会や、各小学校、中学校、高等学校の先生方の実践報告を通して、毎回新しい発見があり、自己研修の充実した機会をいただいておりました。その中で得た「感動」「感激」を、自分自身が授業の中で生徒たちにどのように還元することができるのかを考え続けていました。長崎歴史文化博物館にある「本物史料」に触れるきっかけを作ることによって、生徒たち自身の長い人生の中で、「歴史の楽しさ」や「奥深さ」の一端を知ることができるのではないか、と考えるようになりました。長崎歴史文化博物館教育普及グループ研究員の皆様がとても丁寧に資料貸与の方法や、出張授業の具体的な手続き、授業案の提案、打ち合わせなど、授業者担当者の生徒への思いに寄り添ってくださいました。おかげさまで「坂本龍馬と幕末長崎～なぜ坂本龍馬は長崎に来たのか～」、「長崎版画について」という出張授業に結実し、生徒と共に充実した時間を過ごすことができました。本校の日本史授業は、それぞれの単位の中で通史を学習しており、特に「近現代史」を高校Ⅱ年生で学習し、高校Ⅲ年生で日本史選択者は古代史から学習します。近現代史学習では、「被害の歴史」だけでなく、表裏一体である「加害の歴史」に重点を置いて生徒と共に考える授業を展開します。シラバスの「１．日本の通史を事実に基づき把握し、歴史の構造とその変化の過程を理解する。２．歴史を現代の課題と関連して主体的に学び、歴史的思考力を養う。」という目標達成の一つの成果として、今回の出張授業に繋がりました。研究員の方々が、教科書の中だけでは学ぶことができない資料やデータをご準備してくださり、近現代史の大切な一端を生徒共に分かち合うことができました。

「長崎版画合羽刷」

2. 出張授業の様子

1）授業展開

出張授業実施のためには、①「授業計画書案作成」、②「講師依頼」、③「事前打ち合わせ」、④「当日授業事前準備（授業教室、視聴覚機器準備等）」という手順で行います。⑤「当日授業支援」、⑥「生徒ワークシートまとめ（感想文記入）」。④の際に、視聴覚機器が充実している教室の確保を最優先すること（通常の教室にはスクリーンや、プロジェクターなどを持ち運ばなければならない。できるだけ、講師の先生、生徒、担当教師の移動範囲が最小限であることが望ましい）。10分休憩で次の授業を行う準備は限られている。③はとても重要で、どのような授業展開にするか、分刻みのスケジュール、生徒の受け答えなどの状況、授業の運び方の情報共有など、講師の先生の特性を活かした授業の仕込みをしっかり行うことが大切。

2）生徒の様子

生徒自身の受講前、受講後の劇的な変化、意欲的な発表、目の輝きなど生徒が活き活きとしている様子から、教育効果は高いと感じている。生徒自身の歴史への興味関心の高まりが期待できる。特に今回は、台湾嘉義市の協同中学校 11 名の留学生と共に、本校の 28 名の生徒が出口幹子先生、小熊佐智子先生のご指導のもとで、「長崎と唐人」「長崎版画」をテーマにして学び合うことができた。

長崎と唐人

出島･唐館図パズル

長崎版画

3. 実施する効果

実物の資料を見たり、触れたりすることによって、教科書や史料の読み解きが深まり、生徒の歴史への興味関心が高まっていることを感じます。出島パズルや唐人パズルをグループ単位で並び替えしながら当時の風俗について学ぶことができ、受動的な授業から能動的で自発性が芽生えています。

「長崎版画」は、歴史的背景や現在の長崎版画事情について学んだ後、実際に自分自身で合羽刷りを体験しながら、世界で一つの長崎版画作品を持ち帰ることができるという達成感を一人一人が感じています。お互いの作品を鑑賞し、感想を伝えあっている様子は、社会科教諭として本当に嬉しい瞬間でした。おそらく、家庭に持ち帰った後も、ご家族の話題の一つになったことだろうと想像しています。歴史を身近に感じる要素を充分に備えている出張授業をこれからも年間計画に組み込んでいきたいと考えています。

4. 課題と展望

「長崎版画」作成作業時間の確保が最優先となっており、質疑応答時間の確保が厳しく、先生との直接的な対話時間が取れていません。生徒と共に物事を多角的に見るためにも、その場での振り返り時間の確保を今後取り入れていきたいです。さらに、出張授業の中で芽生えた疑問を、長崎

歴史文化博物館を訪ねて、直接研究員の先生方に質問できる機会を模索していきたいと考えています。そして、生徒一人一人が歴史の楽しさを未来の若者に伝える社会人になって欲しいと期待しています。

「長崎と唐人」「長崎版画体験授業」
活水高等学校５号館プレゼンルーム

2014年7月3日

長崎歴史文化博物館
出口幹子先生、小熊佐智子先生へ

長崎歴史文化博物館出張授業「長崎と唐人」「長崎版画体験授業」を体験して

心に残った一言

1. 長崎版画はどのようにして誕生したのか？

2. 長崎版画はどのような技法で制作されたのか？(素材など)

3. 長崎版画は現代生活にどのようなメッセージを伝えていると あなたは考えますか？

質問したいこと

「長崎と唐人」の授業を受けての感想

Ⅲ　年　　組　　番（　　）

事例 2.

佐世保市立江迎小学校での出張授業について

教育普及グループ
主任研究員　出口　幹子

1. はじめに

平成 24 年度に博学連携事業である「パートナーズプログラム」参加者の山田俊介先生が佐世保市立江迎小学校に転勤されたことを契機に、江迎小学校との連携が始まった。

平成 24・25 年度には6年生対象の出張授業、平成 26 年度には6年生対象の出張授業と移動博物館を同日開催している。

山田先生による導入

出島パズルを組み立てる

2. 出張授業のようす

江迎小学校は修学旅行先として長崎を訪れることが多く、社会科の発展学習と修学旅行の事前学習を兼ねて「江戸時代の長崎」について学ぶ出張授業を実施してきた。

出張授業では教科書に掲載されている江戸時代の長崎や出島についての学習が要望としてあがる。博物館では地理的に来館が難しい地域の学校も出張授業の対象と位置づけているが、遠隔地で暮らす子どもたちと江戸時代の長崎についてどのように結びつけられるのかが出張授業を実施した当初からの課題であった。

今回の出張授業では、子どもたちと江戸時代の長崎を結ぶ手段として、山田先生が子どもたちに身近な通学路をキーワードに、江戸時代の江迎町の歴史的意義や、長崎との関連について分かりやすく繋げていただいたことで子どもたちにとっての日常である「江迎」と非日常である「長崎」や「博物館」を効果的につなぐことでき、授業への興味関心が高まり、意欲的に授業に臨んでいたように感じられた。

授業では江戸時代の長崎港の様子をえがいた「長崎港之図」を見ながら、出島や中国人が暮らす唐人屋敷など、長崎でおこなわれたオランダや中国との交流の様子について学び、出島についての関心が高まったところで、出島パズルを使って出島でのオランダ人の暮らしぶりをみんなで確認することができた。

平成 25 年度の授業では修学旅行で訪れるグラバー園や亀山社中についても、収蔵資料であるグラバー・グラバー邸・坂本龍馬の写真を使ってそれぞれの歴史を紹介したあとに、現在のようすも写真で紹介して、修学旅行への期待を高め、授業は終了した。

3. 評価と今後の課題

江迎小学校の出張授業では、評価される点は3点あげられる。 1点は学校側が授業を実施する目的や期待する効果について明確な学習デザインがあり、事前の打ち合わせを通して館側にも伝えられたことで、出張授

気づきを発表する

業のイメージが学校と博物館で共有化されたことである。２点目は授業の導入時に江迎と長崎を効果的につないだことである。３点目は更に修学旅行前に出張授業を位置づけたことで、通常の出張授業より子どもたちの学習意欲が高かったことである。

この３点が効果的に作用することによって、出張授業は一過性のイベントではなく、授業の一環としての位置づけられるように感じている。

博物館側の反省点としては、江戸時代の長崎については資料を基に読み解きながら説明をしたが、修学旅行で訪れる現在の長崎について、言葉だけではイメージしづらいように感じた。

修学旅行で初めて現在の長崎市と接する方が良いのか、事前に伝えておいた方が良いかは学校の方針次第であるが、現在の長崎市について説明し、江戸時代の長崎と比較する際には、長崎市の航空写真などと比較しながら説明したほうが、修学旅行へのつなぎとしては有効で有るように感じている。

今後「江戸時代の長崎」について出張授業をおこなう場合には、江迎小学校の事例を参考に、対象地域と長崎を効果的につなぐ方法を考えていきたい。

出張授業の学習効果について

佐世保市立江迎小学校
教諭　山田　俊介

長崎歴史文化博物館のパートナーズプログラムの一環として、３年間にわたって第６学年において出張授業を活用した社会科授業を実施した。今回は、この３年間の取組をふり返りながら、その成果と課題について考察していく。

江迎小学校は、平戸市と隣接する県北に位置しており、県都長崎市から約２時間の位置にある。そのため子どもたちの多くは、第６学年の社会科歴史分野の学習において取り上げられる長崎の歴史についての関心がうすいという実態があった。そこで、出張授業を通して少しでも自分たちが住む長崎県の歴史的価値についてもっと関心をもってほしいという目的で、出張授業に取り組もうと考えた。

本校で取り組んだ出張授業は、第６学年の社会科の歴史学習として、出島パズルを用いながら、江戸時代の長崎における海外との交流の様子について学ぶ活動であった。しかしながら、授業を計画するにあたって、長崎の歴史に関心がうすい子どもたちにこの学習とどのように出会わせるかが課題となった。そこで考えたのが、子どもたちに身近な地域の歴史と長崎の歴史を結びつけることを授業の導入で提示することを試みた。本校の通学路の一部は、旧平戸往還である。そこで、実際に江戸時代に平戸藩主がこの道を通って長崎に向かったエピソードを授業の導入部分で知らせるようにした。この活動は、３年間の授業で毎回行ってきたが、長崎の歴史への関心を高めることにたいへん有効だった。

地域と長崎のつながりを知り、
子ども達の活動への意欲が高まった

さて、このように３年間にわたって同じ題材を用いて授業を行ってきた。子どもたちの感想を見ると、出島の生活の様子に深い興味、関心をもつことができたこと、そして、長崎の歴史について親近感をもったことが分かった。また、２年目以降は、この学習の後に、長崎市に修学旅行に行くことになった。そのため、修学旅行の事前学習という側面をもつようになったのだが、自主研修のコースを決める際の参考となることはもちろん、長崎市内での活動に意欲を高めることに役立った。

3年目に新たに行った移動博物館は、
全校児童が観覧することができた

ところで、毎年、第６学年において授業を行ってきたが、この取組について学校全体に周知し、理解を深めることがなかなかできないことが課題となっていた。そこで、３年目は、出張授業に加えて、移動博物館の取組も行った。第６学年以外にも長崎の歴史に触れる機会を作ることで、全校職員に出張授業について理解してもらうことができた。また、第５学年においては、博物館での学び方について学習する時間を設定し、次年度の学習につなげる取組を始めることができた。

このように、同じ授業でありながら、児童の実態に応じて内容を修正して取り組んだり、課題を克服するための工夫を加えたりすることができたのは、３年間取り組んできたことによる大きな成果であったと考える。

事例 3.

出張授業＋移動博物館＝∞
～出張授業と移動博物館を組み合わせた実践～

佐世保市立猪調小学校
教諭　福田　浩久

教室での出張授業

1. これまでの取り組み　～出張授業

長崎市を離れて西海市、佐世保市の小学校に勤務してからは、毎年出張授業をお願いしてきた。出張授業の良さは、学校に居ながらにして博物館の人とものに直接触れることができることである。地理的に遠く、実際に博物館を訪れることができない学校にとっては、学習効果が非常に高い。猪調小学校でのここ２年間の出張授業は、「出島について詳しくなろう」「博物館の宝物に触れよう」の２つのテーマで学習を進めた。その結果、出島を中心として江戸時代の学習をより深めることができた。

2. 今回の取り組み　～出張授業＋移動博物館

猪調小での３回目の取り組みとなる今年度は、今までの出張授業に加えて移動博物館もお願いした。きっかけは、せっかく遠方まで来ていただくのだから、他の学年にも博物館の資料を見せてもらおうという安易な発想だったが、結果的にとてもよい取り組みとなった。

移動博物館の会場は図書館を利用した。本校の図書館は学習スペースが広く取ってあり、全校集会なども開くことができる位の余裕がある。今回はここを会場とした。

宝物に興味津々！

(1)　５年生の実践

５年生は移動博物館の見学を1時間（45 分間）行った。長崎の歴史に親しみを持つことが大きな目標であるが、それとともに６年生から社会科で学習する日本の歴史に興味を持つきっかけとなればと考えた。

子どもたちは初めて見る資料に興味津々な様子だった。特に貿易品に関心を示す子が多く、実際に触ったり臭いをかいだりしながら実感を伴って見学をすることができた。

６年の秋には長崎に修学旅行に行き、歴文を訪れる予定である。今回の学習をきっかけにしてさらに学習を深めていきたいと考える。

江戸時代の長崎の町は…

(2)　６年生の実践

６年生は出張授業を２時間（90 分間）行った。今までと大きく違うのは、教室で行ってきた授業を、移動博の会場で行ったことである。その最大の成果は、たくさんの資料に囲まれて、あたかも博物館の中で学習を進めているかのような感覚で授業を行うことができたことである。学習の流れとその際の中心資料は次の通りである。

・オリエンテーション…博物館の方の紹介と学習の概要について
・寛文長崎図屏風…江戸時代の長崎の町や出島の様子を確認する
・長崎港図…出島とともに唐人屋敷の位置や中国の人々の生活について

出島の中って、すごいね

・出島パズル…出島の人々の生活について
・解体新書、伊能忠敬の地図…出島を通じて広まった学問について
・その後、自由に資料を見学する

この学習を通して、子どもたちは事前に教室で学習していた内容について、実感を伴いながらより深めることができた。資料を間近にしながら学習することの効果の大きさを改めて感じた。

3. これから取り組みたいこと ～出張授業＋移動博物館＝∞

これだけ有意義な取り組みを一つの学校だけにとどまらせるのはもったいないと感じる。例えば近隣の小学校、中学校とともに出張授業を行うこともできるのではないか。

また、学校を会場としないで、地区の公民館や図書館などを会場として移動博を行い、そこに子どもたちを連れて行って出張授業を行ってもらうこともできると思う。そうすると、移動博の対象も広く地域の人々まで広げることもできる。取り組みは無限大に広がる。これからも歴文の力を借りて、子どもたちのために努力していきたい。

3. 移動博物館について

移動博物館の概要について

教育普及グループ
主任研究員　出口　幹子

1. はじめに

長崎歴史文化博物館では、遠隔地や身体的な理由で来館が難しい方々に対して、教育普及活動について広く周知をはかり、活動に触れていただくことを目的にした移動博物館を平成２０年度より実施している。

具体的には県内の学校や公民館、福祉施設などを対象とし、展示環境や来館者層に応じて収蔵する資料や複製品、体験展示などを会場に持ち込み、展示やワークショップを実施する。移動博物館の事業は、長崎市内の福祉施設「ケアハウス稲佐の森」での実施を契機に今日までに、県内26 箇所の会場で移動博物館を開催した。

移動博物館では会場ごとに来館者層や地域の持つ歴史と文化、展示環境が異なるため、学校や公民館、福祉施設などそれぞれの会場を訪れる方々のニーズに即した事業を展開している。

2. 移動博物館使用資料について

実施当初は絵画などの実物資料を、館用車や美術専用車で会場に持ち込み展示を行っており、参加者からは大変好評を博していたが、担当職員内では実物資料を展示する展示環境や資料の運搬にあたって費用や、当日必要な人員について問題が課題としてあがっていた。

移動博物館は対象が徐々に学校に絞られるようになったこともあり、特に学校向けに使用頻度が高い資料については教育普及専用の複製品として整備を進めた。絵画資料の画像は耐久性に優れたクロスユポ地にカラーコピーし、一枚物の絵や巻物風に仕上げたことで、まとめて収納可能になり輸送の負担を大幅に削減することができた。また教科書に掲載されている寛文長崎図屏風も屏風の形式そのままに複製品を製作した。また資料への理解を促し、興味や関心を高めるための学習素材として、屏風の中の登場人物を切り抜きカードにした「南蛮人カード」や、巻物の絵をパズルにした「出島パズル」や「唐人屋敷パズル」、漢方薬の匂いを嗅ぐ体験など、資料を読み解くためのツールを揃えている。

3. 学校と福祉施設での実施について

学校向けの移動博物館は、学校現場に携わる先生方とともに学校教育の中で博物館を利用した授業のあり方について考える博学連携協同事業「パートナーズプログラム」参加者の学校を中心に実施していることもあり、展示内容や解説方法について、意見交換をしながら検討することで、定型化しつつある。

一方、福祉施設については平成２３年度の「特別養護老人ホーム　くじゃ

くの家」以降、実施にいたっていないため、展示内容の充実化は図られていない。福祉施設で実施した4例では、古写真や季節の行事に関連した料理、地域の名前が記された地図など自分自身の知識や経験をもとに見ることができる資料への参加者の関心が高いように感じられた。当館には民具など一般的に回想法で利用される資料の収蔵は少ないため、今後、どのような収蔵資料が福祉施設で活用できるか検討するとともに、福祉施設でのニーズを把握することも課題の一つである。

また当館では企画展にあわせて、県内の博物館や史料館でも移動博物館を開催している。

長崎県と中国福建省との交流の歴史を紹介した企画展「中国福建博物院展」（平成 24 年）の関連事業として、企画展終了後に資料を借用した地域を主な対象に移動博物館を実施した。この移動博物館では展覧会の成果を、資料を借用した地域に還元することを目的に、展示内容を紹介したパネル中心に構成している。地域の歴史的意義の再認識を行うとともに、他地域の歴史についても合わせて知ることで、多様な長崎県の歴史を知る機会として好評を博した。

4. 今後の課題

現在、移動博物館は学校中心の事業となりつつあるが、学校現場で教育サービスとして認識されるまでにはいたってはいない。長崎に修学旅行で訪問する地域の教育委員会や学校に対して積極的に周知をすることで、来館に繋がる事前学習として移動博物館を提供できるように積極的な広報活動をおこなうと共に、今後は学校だけではなく、より地域に開かれた活動に展開できるよう地域との連携の可能性も探っていきたい。

また福祉施設での実施が滞っているため上述のとおり、高齢者の方々に当館の資料を使ってどのようなサービスが提供できるのか検討しながら、実施に向けての働きかけをおこない、移動博物館事業の更なる拡大を目指していきたいと考えている。

学校での移動博物館の実践について

教育普及グループ
主任研究員　出口　幹子

全景(口石小学校)

解説のようす

移動博物館の開催箇所は圧倒的に学校が多く、その半数は小学校での開催である。

そのため、小学校での利用に焦点をあて、教科書掲載資料など注目度が高い資料に関しては教育普及用に整備をすすめ、コンパクトに運搬できるように教育用資料と体験キットのパッケージ化をすすめており、資料の数は会場規模や学校側の希望にあわせる形式で移動博物館を実施している。教育普及用に整備した資料を使うことで、見学中に資料保護の観点で監視する必要がなくなった分、以前よりも子どもたちの反応に注目できるようになっている。

小学校では６年生の歴史学習は学習期間が長いこともあり、歴史の勉強は覚えることが多くて、苦手だという子どもたちが多いという。移動博物館では教科書掲載資料を全面に打ち出すことで、子どもたちからは「教科書にのっていたものを実際に見たりできて、実際はこうなっているんだなあなど、色々勉強させていただきました。」「移動博物館を見て、前より社会の勉強が楽しくなりました。」などの感想が多く、移動博物館の開催時期にもよるが、歴史学習を楽しむ場としても成り立っていることが分かる。

学校での実践では、活用の位置づけを明確にした利用が増加してきた。小学校では６年生の歴史学習の発展学習や修学旅行の事前学習として位置づけられることが多く、５年生の見学では歴史学習の予習や公共施設の見学の仕方を学ぶ場としてなど、さまざまな活用方法が検討されている。

移動博物館では、学校の開催目的や希望する内容、授業での位置づけについて充分に打ち合わせし、学校が目指す活用の目的を博物館職員と共有することで、展示資料から子どもたちが必要とする情報を伝えることが可能となってくる。

学校の授業の中で有効な資料を精査しつつ、資料の充実を図るとともに、移動博物館の活動について周知をはかることで、学校現場での学びの場として認知されるような活動につなげていきたいと考えている。

1. 長与南小学校での実践

長崎市に近接する長与南小学校では、パートナーズプログラム参加者の小林輝子先生の転勤をきっかけに移動博物館を実施している。長与南小学校では修学旅行で九州国立博物館を見学する事前学習として、移動博物館で本物と出会うことや、博物館の楽しみ方を実感する機会と位置づけて開催した。事前の打ち合わせの結果、当日の活動は会場となった体育館に教科書に登場する資料の複製品などを展示した展示ゾーンと、九

州国立博物館の特徴や見学時のポイントなどを紹介する講話ゾーンを設けて、6 年生 5 クラスを 3 つの時間帯に分けて、75 分間ずつで展示解説・自由見学・講話の 3 つの活動をおこなった。

ガイダンスでは、資料横に添えられたキャプションの意味や、見学のマナーについて紹介し、見学時には教科書を参考にしながら、資料に隠された秘密を読み解くことで分かる歴史的な意義に焦点を当て、解説を行った。長与南小学校では博物館職員・学校・子どもたちの 3 者で利用目的を共有していたため、自由見学の際にも教科書と比較しながら資料を読み解いたり、熱心に質問をする子どもたちも多かった。修学旅行では移動博物館を経験したため、九州国立博物館では滞在時間が短かったものの、子どもたちは目当ての展示を積極的に探し、「国宝」や「重要文化財」を発見したり長崎に関係する資料に気づいたりと多くの成果があったようである。

講話のようす（長与南小学校）

2. 日野小学校での実践

佐世保市立日野小学校では同じくパートナーズプログラム参加者の田中英明先生の呼びかけで平成 26 年に初めて移動博物館を実施をした。日野小学校は 6 年生で長崎市を訪れる機会が無いため、江戸時代の長崎についてより深く知ってもらうことを目的に開催した。

「教科書を見てだいたいのことは分かっていたけど、実際にみたり、さわったりしてより深く歴史について分かるようになりました。」「今日の移動博物館の資料は教科書にのっているものもあって詳しくみることができました。日野町の地図をみて学校の場所や自分の家の場所を調べたりできました。（中略）もっとたくさんの資料を見たいので博物館に見に行きたいです。」といった子どもたちの感想からは江戸時代の長崎についての関心が高まっていることが分かる。また今回学校がある佐世保市と長崎市が離れていることもあり、学校周辺や佐世保市内の様子が分かる古地図などを持参し展示したところ、学校の町名を探したり、商業地や駅など自分達の知っている場所と関連づけて、資料を読み解いている子どもたちも多く見られた。

移動博物館は江戸時代の長崎の歴史を中心に展示するが、江戸時代、自分達が住む町がどの様な場所だったのかに興味が進む子どもたちもいる。対象地域に関連した所蔵資料を活用し、子どもたちが郷土の歴史を学習できる場を提供することの必要性を感じた実践であった。

事例 1.

移動博物館の学習効果について

長与町立長与南小学校
教諭　小林　輝子

1　位置づけ

（1）　社会科の学習をより深めるために

移動博物館では、主に江戸時代の資料を数多く展示される。江戸時代の学習は、６年生の1学期後半から2学期初めの単元となっており、学習後の発展学習として、移動博物館を実施した。

（2）　社会体験学習の充実を図るために

移動博物館では、社会科の学習だけでなく、見学のマナーや見るポイントなどを学習することもできる。そのため、修学旅行での公共施設（九州国立博物館）見学の事前指導の場として位置づけた。

2　学習の流れ

【導入】

社会科の学習を深めるだけでなく、公共施設での見学のマナーを学ぶ場でもあることを確認する。見学当日は、「体育館」ではなく、博物館であることも押さえる。

【展開】

児童は社会科の資料集を手にし、解説を聞きながら見学する。その後、自由見学とする。

【終末】

「博物館」が有する資料の重要性や資料がもつ価値などを説明した上で、九州国立博物館の見学ポイントを押さえる。

3　学習の様子

（1）　教科学習の様子

児童は、これまで教科書や資料集の中で見てきた資料の数々が、目の前にあることに感動していた。また、移動博物館の資料の中には、パズルや絵合わせなど資料を注意深く見せるための工夫が為されているものもあり、普段教科書の中で見ることはできない細かい部分にも、目をこらして見ようとする児童の姿も見られた。

（2）　見学の様子

馴染みのある体育館が、いつもとは違った空間になっていることに、初めは緊張して静かに見学ができていた。しかし、自由見学になると話し声が大きくなったり、走って移動したりする場面もあった。また、一人でじっと興味のある資料を見ている児童もいれば、友達と話しながらいろいろな資料を見ている児童もおり、歴史の学習への関心度に個人差があることが見えてきた。

（3）　児童の感想

○教科書に載っている資料は、一部分だった。全体を見ることができて感動した。

○教科書では分からない細かな部分を見ることができたし、大きさや感触なども分かった。

○屏風の見方が分かった。

○もっと知りたくなったので、歴文に行ってみようと思った。

○早く九州国立博物館に行きたい。

4　学習の効果

（1）　教科指導の観点から

教科書では伝わらない質感や大きさ、匂いなど五感を刺激する資料は、児童に大きな感動を与え、「歴史」を肌で感じることができるいい機会となった。さらには、資料のどこを見れば、当時の様子が分かるのかを丁寧に解説していただくことで、資料を「見る」のではなく「読む」楽しさを味わうこともできた。

（2）　社会体験学習の観点から

①　修学旅行は児童にとって一大イベントであり、団体でホテルに宿泊することやガイド付きのバスに乗ること、現地での活動など、ほとんどが初めての活動ばかりである。そのため、事前に指導することも多い上に、イメージがつかない場面の指導も受けることになる。児童にとって、経験のないことやイメージがつかないことは大きな不安材料となり、実際の場面でスムーズに活動できることは少ない。その点、九州国立博物館の見学は、移動博物館を一度体験した上での活動となるので、要領をつかんで見学することができた。児童にとって、実際に体験したことは最も大きな学びである。特に移動博物館で上手くできなかったことや失敗したことを生かして、成功体験につなげられたことは、より修学旅行を充実させる結果となった。

②　移動博物館での児童の様子から、次のような実態がみえた。

＊歴史に興味のある子もいれば、そうでない子もいる。
＊たくさんの情報をうまく処理できる子もいれば、苦手な子もいる。
＊初めてが苦手な子がいる。
＊話を聞くだけですぐに理解できたり、そうでない子もいる。

教師が事前に児童の実態をつかむことで、見学のさせ方を考え直すことができた。当初はグループを組んで見学させる計画だったが、歴史に対する興味関心の程度の差があるため、膨大な展示物の中から1つでも自分の興味ある資料を見つけたり、じっく

り読み取ったりできるように個人見学を可とした。その結果、グループからはぐれるといった心配や友達に合わせてしまい、ゆっくり見学できないといった問題もなく、各自が興味のあるブースをじっくりと見学することができた。

③　九州国立博物館の見学については、「小学生には難しい」という理由で旅程から外す学校もあると旅行会社からも聞いていたが、本校の児童からは、「時間が足りなかった」「また家族と行きたい」といった声が上がっている。さらには、九州国立博物館の方にも、「どんな事前指導をしてきたのか教えて欲しい」という質問を受けるほど、充実した見学ができている。移動博物館で感じた「大きな感動」と、博物館見学という「体験」が、これらの成果を生んでいると言える。

④　児童にとって博物館は、「難しい」イメージがあり、敷居の高い場所である。これまでは家庭で連れて行ってもらわない限り行くことがなかった博物館も、移動博物館を経験することで、自分から「もっと見たいので行ってみたい」と思えるようになった児童もいた。博物館がもつ「難しい」というイメージを払拭する機会にもなった。

(3)　特別支援の観点から

情報量の多さは、児童の集中力の妨げになることがある。そのため社会科の学習に関連する資料が適度な量で展示される移動博物館は、博物館デビューの児童にふさわしいものである。さらに、学校というホームグランドで活動できる安心感が、集中して見学できる要因となっている。

5　今後期待できること

【社会科における言語活動の充実】

移動博物館で展示解説文を読んだり、説明を聞いたりした後に、自ら資料の解説文を書いたり、ガイド役となって説明をしたりする活動を取り入れることで、社会科における言語活動の充実を図ることができると考える。

事例２.

移動博物館の取り組みについて

佐世保市立日野小学校
教諭　田中　英明

１. 実施にあたっての経緯

長崎歴史文化博物館のある長崎市と本校のある佐世保市は地理的に大きく離れているため、長崎市まで移動することになると、貸切バスを利用するしかない。

昨年度は美術館のバス支援を受けられたため、６年生は美術館見学と併せて、歴史文化博物館を訪れ、見学活動をすることができた。今年度も見学させたいという思いはあったが、金銭面で実現は厳しかった。

そこで、『行くことができないなら、来てもらえばいい』という考えで、日野小学校で移動博物館を開催していただくよう長崎歴史文化博物館にお願いしたところ、快く引き受けていただいた。

本校で実施するにあたって、歴史学習のまとめとして、６年生を対象に「長崎ってすごかっぞ」ということが分かる移動博にしてほしいとお願いした。

長崎の歴史について、佐世保市に住む子どもたちの多くは教科書に出てくる程度の知識しかない。しかし、将来進学や就職で長崎県以外の土地に巣立っていったとき、佐世保出身だから知らないということにならないよう、長崎が日本の歴史で果たした役割を知っておいてほしいため、このテーマでの開催となった。

２. 移動博物館の実際

当日は、６年生が、午前２クラス、午後１クラス、１単位時間ずつ見学を行う。

体育館の半面に、テーマごとに６つほどコーナーが作ってあった。

始めに、歴史文化博物館の先生から、長崎歴史文化博物館の概要や資料の見方、諸注意などのあと、クラスを２グループの少人数に分け、展示解説をしていただく。１グループ 14 人程度の少人数のため、全ての子どもが一つ一つのコーナーでしっかり資料を見ることができ、資料の丁寧な説明と質問を交えながら子どもたちの分かる言葉で解説していただいた。そのため、子どもたちの関心が高まり、歴史に興味のある子どもも十分に満たされる内容であった。

昼休みは他の学年にも見学を可能とした。担任に付き添ってもらって、学級単位で利用するという条件であったため、低学年から高学年まで、４クラス程度が訪れた。また、数多くの体験できる資料があり、低学年にとっても楽しく移動博物館を体験することができた。

3. 移動博物館を実施する効果

○遠隔地であっても、

・博物館の様々な資料や展示物を観ることができる。

・教科書で学んだことを、観る、触れることで、学習の定着を図ることができる。

・職員の方から、教科書では学べない、深い知識を学ぶことができる。

・長崎が日本の歴史に大きく関わっていることを学ぶことができる。

・歴史学習に深まりをもつことができる。

○移動博物館だからこそ、

・学習のねらいを達成するために必要なものを凝縮して持ち込んでいただくことで、短時間で、ポイントを絞った深まった学習ができる。

・お客さんを気にすることなく、独占して資料を見ることができる。

○移動博物館を行うことによって、

・長崎のことをもっと知りたいという気持ちになる。

・歴史文化博物館に関心を深め、実際に足を運んでみる機会となり、他の施設なども利用してみようという生涯学習へとつながっていく。

・5 年生以下の子どもたちへの歴史学習に対する抵抗感をなくすことができる。

・低学年児童が歴史的なことを知らなくても、体験キットを通して触れておくことで、将来的な学習への布石となる。

・中学校での歴史学習に向けての意欲づけとなる。

・博物館に行ったことのない教員の研修の場となる。

・教員に移動博というものができるということを知る機会になる。

4. 課題と展望

いいことずくめであるのだが、レプリカが多く、本物が揃っている歴史文化博物館とは違うのは否めない。

また、最大限の効果が得られるよう、学校側がきちんと計画を立て、ねらいをしっかり考えた上で開催時期をきめていく必要がある。

今後は、継続的に移動博を行うことが大切である。また、さらに効果的な学習となるよう、移動博と出張授業を組み合わせたり、複数回の移動博を実施したり、近隣の学校や地域との共同開催する方法も考えていくことができるのではないか。

福祉施設における移動博物館の実践について

教育普及グループ
研究員　一瀬　勇士

長崎歴史文化博物館　〝初出前〟ケアハウスに

利用者ら「懐かしい」

絵画・古写真など90点

2008年12月10日掲載　朝日新聞

1. 移動博物館のはじまりと経緯

2007年（平成19）、県民・市民に長崎歴史文化博物館の取り組みを広く知ってもらうためのきっかけづくりとして、来館することが困難な遠隔地域の在住者や身体の不自由な高齢者を主な対象とした移動博物館の実施計画が策定された。

移動博物館の構想を受け、すでに移動博物館の実績があった全国の事例を参考にしながら、教育普及グループが主体となって準備を進めることとなった。

しかし、具体的な実施に向けた協議の中で大きな課題となったのが、「予算の確保」と「資料選定」であった。移動博物館は、新規事業での立ち上げであったことから、開催経費の積算や実物資料を館外へ持ち出した場合の保険やセキュリティの問題など解決しなければならない課題を多く抱えていた。こうした様々な課題を博物館の設置者である長崎県や長崎市の担当部局との調整・協議を経て、2008年（平成20）から本格的に実施することとなった。

まず、同年5月に各報道機関へ移動博物館の実施及び募集の告知を行い、記事掲載の依頼を行った。これを受け県内の数カ所にて福祉施設を運営する社会福祉法人長崎厚生福祉団（ケアハウス稲佐の森）からの開催希望を受け、同年12月9日に長崎歴史文化博物館初の移動博物館を実施した。

ケアハウス稲佐の森での移動博物館開催を皮切りに県内の学校や福祉施設などにおいて、開催地の歴史や風土、地域のニーズに即した内容で毎年行っている。また、2008年度から始まった移動博物館は、26回を数えるまでに至っており、今後も継続しながら県内各地の学校や福祉施設、博物館、公民館といった公共施設に巡回できるよう積極的なPR活動を行っていく予定である。

移動博物館のようす（ケアハウス）

展示解説のようす（ケアハウス）

2. 福祉施設における移動博物館の実践例

事例1）ケアハウス稲佐の森

ケアハウス稲佐の森は、社会福祉法人長崎厚生福祉団が平成15年10月に開設した高齢者向けの福祉施設である。敷地内には、ケアハウスをはじめ、特別養護老人ホーム、介護老人保健施設の入所施設と通所施設、診療所などを併設しており、多機能型の福祉施設として、高齢者の健康と暮らしをサポートしている。

移動博物館の開催にあたり、事前準備の段階として、会場となる施設の

版画体験のようす（ケアハウス）

完成した版画を手に持つ参加者（ケアハウス）

展示設営のようす（サンライフ）

現場視察を行った。留意した点としては、会場のスペース、施設で利用できる備品、照明設備、温湿度環境、資料の搬入搬出路、参加対象者など福祉施設側の要望にも即しながら、準備を進めることとなった。

すべてが手探りの状況であったことから、移動博物館用の解説パネルを新規で作成し、梱包から輸送、展示まですべてを博物館職員（学芸員）で行わなければならず、事前準備にかなりの時間を要した。予算の都合上、資料輸送の専門業者に頼ることができなかったため、輸送用の車も職員でレンタカーを手配し、分乗して資料を運ぶこととなった。

展示資料の選定にあたっては、長崎の歴史文化を紹介しつつ、高齢者にも身近な資料や懐かしさを感じてもらえるような展示構成とした。また、可能な範囲内にて実物資料や体験的要素も加えた内容とした。例えば、シーボルトのお抱え絵師として知られる川原慶賀が描いた年中行事絵「正月図（2点）」「餅搗図（1点）」や長崎版画を再現した合羽刷り体験、折り紙体験などである。ケアハウス稲佐の森での移動博物館では、展示資料をただ見るだけではなく、なるべく五感を使った展示構成になるよう工夫を図った。これ以外にも展示の留意点として、福祉施設には車椅子を必要とする高齢者もおり、通常の資料設置の高さよりも低く設定して展示を行うなど、高齢者に配慮した展示を行った。

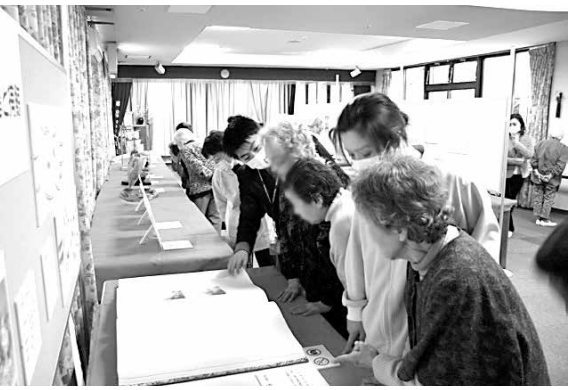
特に高齢者の方に人気が高かったコーナーは、長崎版画の体験であった。施設職員のサポートのもと、参加者は真剣な表情で作品づくりに挑戦していた。また、折り紙体験も好評で、博物館ボランティアの説明を受けながら、それぞれ思い思いの作品を制作されていた。

しかし、決して良い面ばかりではなく、反省すべき課題も多かった。施設職員や高齢者を対象にしたアンケート結果からは、解説パネルの文字の大きさや開催時間に関する要望が多くみられた。高齢者に配慮したつもりではあったが、「文字が小さく見えづらかった」「時間が短くゆっくり見ることができない」などの意見が寄せられた。また、版画体験そのものは良かったものの、サポートする博物館職員の数が少なかったこともあり、施設職員の負担も多かったことがわかった。

事例2）軽費老人ホーム サンライフ

軽費老人ホームサンライフは、大村市荒平町にある福祉施設で、ケアハウス稲佐の森を所有する社会福祉法人長崎厚生福祉団が管理運営する施設である。昭和58年8月に開所され、約50名の高齢者を受け入れている。

ケアハウス稲佐の森と同様に会場の下見と施設職員との打ち合わせを行った。サンライフでの移動博物館では、入所者だけではなくディサービス利用者も参加対象に含めることや大村市の歴史・文化に関係する資料の展示、体験要素を盛り込んだ内容の移動博物館を開催する方向で調整をおこなった。また、初回の移動博物館では、車椅子利用者が多かったが、今回の参加者は比較的歩いて見学可能な入所者が多く、杖を利用する高齢者への配慮が必要となった。なお、軽費老人ホームサンライフの利用者



展示資料を見る入所者（サンライフ）

の平均年齢は、約 83 歳で 67 歳から 99 歳までの年齢層があり、その多くが大村市出身の方であった。そのこともあり、利用者の見学時の疲労軽減と事故防止のため、作品と利用者との間隔を広く取り、手をテーブルに添えながら見学できるような工夫と大村市の歴史文化に関係する資料構成が課題となった。

長崎歴史文化博物館には、大村市に関係する歴史資料を一部有しているものの、実物資料を館外に持ち出すことは様々な制限があり、困難な状況であった。そのため、大村市教育委員会に移動博物館の協力を仰ぎ、画像資料とパネル資料の借用を依頼し、展示構成の補足とした。また、長崎県下のキリシタン史や墓石に詳しい大石一久氏のご協力のもと、キリシタン墓碑の拓本資料 4 点をお借りし、展示構成に加えることとした。

軽費老人ホームサンライフでの展示構成は、次のとおりである。

展示全体を 3 章構成でまとめ、約 30 点の資料を展示した。第 1 章では「キリシタンと大村」と題し、キリシタン大名として知られる大村純忠の活躍からキリシタン弾圧を物語る資料を紹介。第 2 章「豊かな海大村湾と捕鯨」では、捕鯨で財を成した深澤義太夫勝清や大村湾に生息するスナメリ、ナマコが描かれた資料などをパネルで紹介。第 3 章では「幕末明治の大村」にスポットをあてて、大村出身の渡辺昇や楠本正隆などの人物を中心に紹介した。

大村市にゆかりの深い展示構成であったことから、参加者には概ね好評で、興味深く見学される入所者が目立った。版画体験も好評で、利用者からは「また、来てほしい」や「もっと体験したい」という好意的な感想が聞かれた。

3．移動博物館の効果＝『博福連携』の試み

移動博物館では、これまでに地域の福祉施設に 4 度訪問し、身体的な理由や地理的条件で直接来館できない高齢者を対象に長崎の歴史や文化を紹介してきた。特に福祉施設における移動博物館の実施は、地域博物館の存在意義や異業種との連携・交流などにおいて効果が期待される分野であるといえる。

現在、日本は超高齢化社会を迎え、社会福祉制度の在り方が議論される中、福祉施設を取り巻く社会環境も様変わりしつつある。そのような社会環境にあって、生涯学習の受け皿ともなっている博物館と福祉施設との連携＝「博福連携」は、新たな付加価値を生み出す試みとして注目されている。

近年、全国の博物館でも福祉施設と連携した取り組みが行われるようになってきており、北名古屋市歴史民俗資料館や愛媛県歴史文化博物館では、博物館の収蔵資料を活用した「回想法」による高齢者ケア、地域高齢者の支援事業が先進的に行われている。

回想法を用いた取り組みは、高齢者の認知症ケアや予防に有効とされ、高齢者同士や世代間交流のコミュニケーションツールとしても効果が期待

移動博物館のようす（アンムート櫻馬場）

されている[1]。そもそも回想法とは、懐かしい写真や生活道具などを用いて、かつてのライフスタイルや人生経験を振り返ることで、脳を活性化させ、気持ちを豊かにする心理的・社会的アプローチ法の一つである。こうした回想法は、1960 年代の欧米諸国から始まり、日本でも病院や介護福祉施設を中心に認知症予防を目的としたプログラムとして導入されている[2]。

ケアハウス稲佐の森や軽費老人ホームサンライフで実施した移動博物館では、体験プログラム（版画体験・折り紙体験）や古写真を活用したことにより、参加者の満足度も高いものとなった。展示資料やさまざまな体験を通じて感じられた「懐かしさ」や「昔話」は、高齢者にとって重要なキーワードとなっている。高齢者一人一人の「ライフヒストリー」や「ノスタルジー」を振り返り、感化し得るものとして福祉施設への有効性を得られたことは、今後の取り組みに大きな示唆を与えるものとなった。

移動博物館のようす（くじゃくの家）

4．評価と課題

長崎歴史文化博物館が実施する移動博物館は年々、コンパクト化・パッケージ化されつつある。このことは事前準備の円滑化や展示資料の固定化あるいは職員自身の経験値が高まったことによるものが大きいといえる。

しかし、実施回数 26 回に対して福祉施設への実施回数は 4 回に留まっており、2011 年に実施した「特別養護老人ホームくじゃくの家」を最後に 4 年近く実施できていない現状にある。このことは、福祉施設への移動博物館の需要や博物館側からのアプローチが上手く整っていないことを物語っており、地域における福祉施設の情報を積極的に入手していく必要がある。

また、回想法に有効とされる資料の多くは、高齢者自身が経験したことがある生活の道具が主体となっており、懐かしさを回顧しやすい時代は、大正から昭和の時代のものに限定されがちである。そのため、長崎歴史文化博物館が所蔵している資料の多くは、江戸時代の長崎資料が中心であり、高齢者が生きた時代とのギャップが生じていることは否めない。高齢者の記憶を呼び覚まし、懐かしさを感じてもらうには展示資料の見直しが必要であるが、ライフヒストリーには個人差があり、「博物館の資料がどの程度高齢者にとって有益な効果があるのか」については、福祉施設への移動博物館の実践を今後重ねていきながら、分析していく必要がある。

学校と博物館の連携事業（博学連携）として実施した移動博物館は、回数を重ねるごとに一定の効果や目的、学校側のニーズに即した内容を提供することで、これまでにない学習効果を得るまでに至った。それに対して、福祉施設への連携事業（博福連携）は、まだまだ試行錯誤の段階である。「地域に開かれた博物館」「進化する博物館」を標榜する当館にとって、福祉施設との連携事業は、地域博物館

の社会的使命を果たす絶好の機会であり、「いつでも、どこでも、だれもが利用できるユニバーサルミュージアム」を実現すべく、地域社会に還元していかなければならない。そのためには、普段から地域社会との綿密な連携協力の体制を構築していくことが不可欠である。

生涯学習社会の到来は、こどもから高齢者まで幅広い年齢層が「生きる力」「生きがい」を学び、豊かな人生を享受する社会として「自立」「協働」「創造」可能な社会環境の充実が必要とされている。移動博物館の実践は、そうした社会的背景の高まりの中、今後博物館の重要な事業として需要が高まっていくと思われる[3]。多様化・高度化する地域社会のニーズにいかに博物館が応えていくかが問われている。

参考文献

(1) 鳴瀬麻子『回想法を用いた博物館の新たな機能に関する考察ーシニア世代と若者世代の文化伝播を円滑にするための新たなシステムの構築に向けてー』大妻女子大学博物館，人間生活文化研究 ,No.23 ,2013

(2) 上田晶子『地域資源を活用した高齢者ケア～広がりを見せる「回想法」について～』共済総研レポート ,2011.2

(3) 北名古屋市歴史民俗資料館研究紀要３『地域回想法の可能性ー多様な導入形態と地域への効果』北名古屋市歴史民俗資料館 ,2009

4. 貸出教材について

貸出教材について

教育普及グループ
主任研究員　出口　幹子

1. はじめに

長崎歴史文化博物館では学校の授業で活用してもらえるように、所蔵資料をパネル化したものや、屏風など絵画資料を大型プリンタで出力したものを中心に、貸出教材の整備を進めている。

貸出教材は教科書掲載資料を中心に作成しており、小中学校の社会科で江戸時代を学習する際の補助教材や文化祭での展示資料、修学旅行の事前学習資料として利用されている。

2. 活用例

博物館の近隣にある長崎市立桜町小学校では、校内に歴史年表などを掲示した「歴史コーナー」への掲示資料として江戸時代の長崎の町の様子や町名が記入されている「寛文長崎図屏風」の貸出をおこなった。桜町小学校の校区がこの屏風の中にほぼ描かれていることもあり、子どもたちは自分達が住む場所が江戸時代、どのような町だったのか興味深く見ていた。

次に江戸時代の長崎港の様子が描かれた「長崎港之図」を貸出した。子どもたちは社会科で学習したことや知識とつなげて、出島や唐人屋敷の位置を確認するとともに、中国船やオランダ船は長崎くんちの演し物とつなげて、その関連性を読み解いたりしていた。

また絵画資料以外に企画展の体験展示で整備した体験グッズも貸出教材として活用され始めた。2012 年に実施した長崎と中国と交流の歴史を紹介した「中国福建博物院展」では、異文化理解の一環として、中国の教科書や学用品、祭祀道具など収集し、自由に触れる体験コーナーを設置した。また 2013 年の「対馬藩と朝鮮通信使展」では、同じく韓国の教科書や学用品、チマチョゴリなど民族衣装などを揃え、触れるだけではなく、民族衣装を自由に着ることができるコーナーも設置している。

教科書や学用品など自分達の身近な物に触れる異文化理解教育への反響は大きく、これらの体験グッズは国際理解や外国語活動の補助教材として活用されるようになってきた。

2. 今後の課題

貸出教材の活用は年間４～５件ほどであり、特に所蔵資料の利用数は伸び悩んでいるのが現状である。その要因の1つとしては、紙媒体での提供があげられる。近年、教室の情報機器が整備されていることもあり、紙媒体ではなくデジタルデータでの画像の提供についての要望も多く聞かれるようになった。貸出教材の形態については今後の検討課題の1つである。また２つ目の要因としては、貸出教材は教材のみの提供であるため、活用方法は自由である反面、教材研究が必要となってくる。既存資料の基礎情報や実践例を提供するとともに、学校の単元で使える資料を精査するなど、学校のニーズを把握しながら整備を進めることで、利用の促進につなげていきたいと考えている。

学校用貸出教材の活用事例

長崎市立川原小学校
教諭　加藤　尊城

1　事の始まり

事の始まりは平成 24 年度、5 年生担任だった折、同学年の先生から「長崎市国際交流員による国際理解講座というものがありますが、授業に取り入れてみたらどうでしょうか。」

という提案を受けたことでした。**外国語活動**は「英語を原則とする」としながらも、「**英語圏以外の国**の文化」を取り入れた体験的な学習を推奨しています。長崎市は、外国との交流という点では日本史上特異な役割を果たしてきた所であり、外国語活動を仕組む上でも**多くの可能性と選択肢を備えている**と考えてきました。そういったわけで、同学年の先生の提案には深く納得する所があり、さっそく外国語活動の授業に取り入れたのでした。

その翌年度、転勤した現勤校で 6 年生をお預かりすることとなりました。前任校とは学校規模が変わり、**少人数の利点**を生かして前年度の取組を**さらに深める**ことができないかと考え、講座に申し込みました。

2　主な授業内容と学校用貸出教材との関係

国際理解講座には、「1 クラスに対して 3 回まで」という規定がありました。平成 24 年度の実践では「30 人以上の学級 2 クラスまとめて 1 回の授業」でしたが、講師との関係の深まり、韓国文化に対する理解の広がりを促す意味でも、規定上限の 3 回実施でお願いしました。

各回の内容も事前に話し合いました。1 回目は「韓国という国、韓国の言葉・くらし」、2 回目は「韓国の遊び・音楽」、3 回目は「韓国の料理（おやつ）」と決まりました。

歴史文化博物館の学校用貸出教材を活用させてもらったのは、**第 1 回目の講座**でした。市の国際交流課との事前打ち合わせの中で、教材的に薄さを感じたのが 1 回目分だったのです。講師側でも、地図、ハングル表、国旗、お金、食器などを準備してくださることになっていました。

しかし、第 2・3 回講座と比べると、「試す・作る」といった動的内容よりも「聞く･見る･知る」といった座学的要素が前面に出やすい内容でした。より多くの実物教材を準備し、子どもたちへの**投げかけを**大きく**広げる**必要性を感じていたのです。

そこで、かねて歴史文化博物館（以下、歴文）の**パートナーズシップ**で韓国グッズの紹介を受けていた私は、即座に歴文に連絡を取り教材の借り受けをお願いしました。

借用物は、教科書、通学バッグ、文房具（筆箱、色鉛筆、カラーペン、鉛筆削り、各種ノート等）、 教科書、学習参考書、伝統的衣装（チョゴリ、ハンボック、アクセサリー類）でした。これらが一抱えほどの**パッケージ**に収められており、持ち運びやすい状態で準備されていました。常に貸出スタンバイ状態で収納されている、という**機動性の高さ**に驚きました。

また、

「著しく汚損、破損したりする恐れがない限り、子どもたち自身に**触れさせたり身に付けさせたり**していただいても構いません。」

という**至って寛大な条件**で借り受けることができました。授業を仕組む側として、これほどありがたいことはありません。「もの」はないよりもあった方が良いですし、「ただ見る」よりも「五感で確かめることができる」方が圧倒的に効果が高くなります。申し分ない条件の下で、教材準備を整えることができました。

3　実際の授業

平成 25 年度の実践場面をもとに、話を進めます。

講師の方が学校に到着される前に、会場となる教室の準備を進めました。事前の打ち合わせで準備機材と主な配置は確認できていましたから、それ以外のスペースを有効活用する形で拝借した教材を配置しました。

ちなみに、給食終了後、子どもたちは教室から出し、

「後をお楽しみに♪」

といった感じで興味と期待をそそっておいて戻ってこないように念押ししました。

左の写真は、教卓横に準備した教材です。給食用の配膳台を活用して設置しました。

左右は通学用のバッグで、中に教科書や筆箱を入れておきました。**実際に通学する場合の形**で見てもらおうと考えたからです。

中央は、学習参考書等です。これも収納用の透明ビニルバッグに入れておきました。

通常の状態をイメージして配置しました。

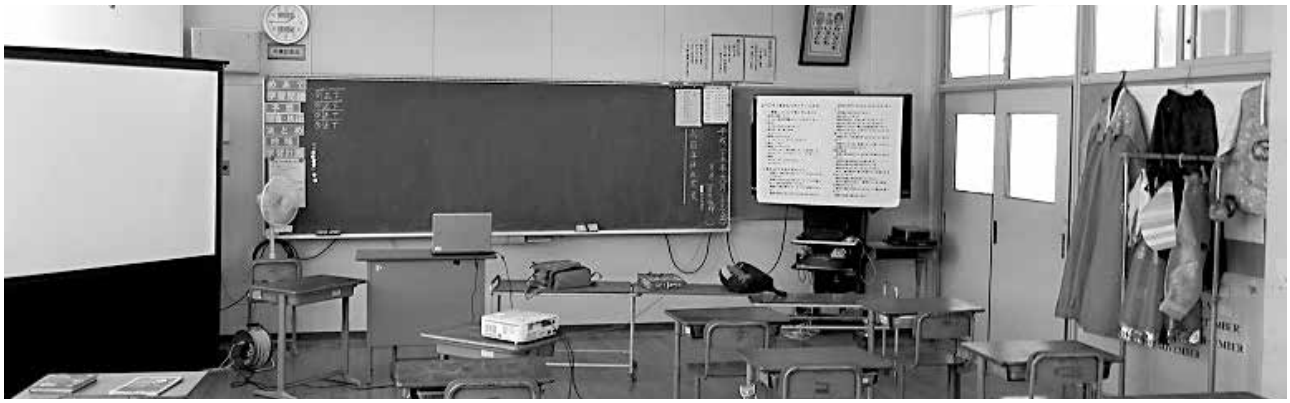
右の写真は、伝統的な衣装です。

教室前方の出入り口横に衣装をかけました。ハンガーは学校の物などを使いました。サイズや彩りが多彩で、子どもたちの**視覚に強く訴える**物でした。

インパクトが強いので話を聞く時の妨げになるのではと懸念しましたが、韓国ムードを高めたかったので敢えて目に付く位置に配置

しました。

実際には、子どもたちの切り替えがしっかりしており、集中が過度に乱れることはありませんでした。子どもたちは偉い！



教室前部の状態です。この後、講師にも配置の是非を確認してもらいました。

黒板には講師の準備教材が広げられ、**韓国テイスト満点**な場の設定となりました。

授業の中では講師が衣装を手に取り、韓国の自然観と衣装デザインの関係を説明してくれました。実物を目の前にした説明だったため、子どもたちにとって**たいへん解りやすい**説明になったようです。

右は、クラスの子が実際に衣装を身につけた所です。ただ吊してある状態よりも、デザインの特徴が**生き生きと伝わり**ました。

実物教材の力はもともとたいへん大きいのですが、その力は子どもとの距離が**縮まれば縮まるほど大きく**なります。

下の写真は、教科書や参考書、文房具を**手にとって**見ている場面です。授業後のアンケートで、子どもたちにとって最も印象深かった韓国グッズが教科書だと判明しました。

教材となった教科書が、子どもたちと**同じ６年生**の物だったことが一層効果を高めたようでした。手にとって眺めページを繰って内容を見ることで、日本の物と比較でき、同一・類似点、相違点が**自分なりに理解でき**

たようです。

体験的な理解の深まり（この場合は自己分析が付加された。）が、興味関心を高めることにつながったようです。

しかし、当然のことながら、この時の授業について改めて考えてみると、いくつか反省すべき点もありました。最も反省すべきは「教材との向き合わせ方」でした。本講座最初の授業ということで、展開の見通しが不十分でした。そのため、広げた教材をフリーな状態で子どもたちが手に取って見る時間が少なかったと思います。

また、講師との打合せも不十分で、もっと早めに教材を借り受けて持参し、どの教材をどの場面でどのように使うかまで確かめておくべきだったと思いました。

ただ、国際交流員という「本物の人材」と歴文が持っている「本物の教材」を組み合わせたことは大きな成功でした。「本物」がつながるほど、重なるほど、その効果は加速度的に向上することがはっきりしました。

平成 26 年度の授業では、講師もこちらがどのような物を準備できるかよく理解してくれており、

「去年のように教科書や洋服なども準備できますか？」

と尋ねてくださいました。講師と学校が**教材に対する認識を共有**することができ、貸出教材の活用が深まりました。

4　貸出教材の活用を振り返って

今まで、出前授業、デリバリーミュージアムでお世話になってきた経験はありましたが、貸出教材の活用は本実践が初めてでした。しかし、この 3 種の試みで明らかになったことがあります。それは、

「本物の人材＋本物の教材」

の効果がいかに高いかという事実です。出前授業にせよデリバリーミュージアムにせよ、そこには歴文の学芸員さんという「本物の人材」がいました。歴文の持ち味を引き出す**黄金律**はここにあるのではないか、と思いました。そして、その黄金律をベースにすれば、まだまだいろいろな授業を創り出すことができると思います。

資料編

1. 遠隔授業

遠隔授業実績

日　時	対象	授業テーマ	講師・進行
平成 18 年 2 月 13 日(月)	長崎県立壱岐高校 2 年（120 名）	長崎貿易とオランダとの交流 長崎貿易ー中国とオランダ貿易	講師：大石一久・徳永宏・本馬貞夫・松下久子（以上長崎県文化振興課）、越中勇・安高啓明・松尾晋一・平岡隆二（当館研究員） 進行：矢野香織（当館研究員）
平成 18 年 8 月 25 日(金) 10：25 ～ 12：15	長崎県立壱岐高校 2 年（110 名）	長崎奉行について 長崎奉行所とキリシタン	講師：安高啓明（当館研究員）・大石一久（長崎県文化振興課） 進行：矢野香織・下田幹子（当館研究員）
平成 19 年 2 月 8 日（木） 13：25 ～ 15：15	長崎県立壱岐高校 2 年（110 名）	ヨーロッパとの出会いから鎖国へ 長崎貿易ー中国貿易とオランダ貿易	講師：大石一久（長崎県文化振興課）・安高啓明（当館研究員） 進行：矢野香織・下田幹子（当館研究員）
平成 19 年 7 月 10 日(火) 13：25 ～ 15：15	長崎県立壱岐高校 2 年（80 名）＊日本史選択	ヨーロッパとの出会いから鎖国へ 長崎貿易ー中国貿易とオランダ貿易	講師：大石一久（長崎県文化振興課）・安高啓明（当館研究員） 進行：矢野香織・下田幹子（当館研究員）
平成 20 年 3 月 14 日(金) 13：25 ～ 15：15	長崎県立壱岐高校 2 年（120 名）＊文系日本史選択者及び理系地理選択者	ヨーロッパとの出会いから鎖国へ 長崎貿易ー中国貿易とオランダ貿易	講師：大石一久（長崎県文化振興課）・安高啓明（当館研究員） 進行：矢野香織・下田幹子（当館研究員）
平成 20 年 7 月 8 日（火） 13：30 ～ 15：10	壱岐市立盈科小学校 6 年（70 名）	江戸時代の長崎に関連した博物館資料を紹介しながら、修学旅行で訪れた長崎の町の歴史を振り返り、郷土の歴史と文化への理解を深める	講師：安高啓明（当館研究員） 進行：加藤謙一（当館研究員）
平成 21 年 3 月 18 日(水) 13：25 ～ 15：15	長崎県立壱岐高校 2 年（110 名）	博物館の仕事と歴史研究	講師：安高啓明（当館研究員） 進行：加藤謙一（当館研究員）
平成 21 年 7 月 6 日（火） 13：25 ～ 15：10	壱岐市立盈科小学校 6 年（70 名）	モノから歴史を語る ~ 邪馬台国への道・一支国を探る	講師：加藤謙一・安高啓明（当館研究員）・大石一久（長崎県文化振興課）
平成 21 年 7 月 7 日（火） 13：25 ～ 15：15	長崎県立壱岐高校 2 年（98 名）	モノから歴史を語る ~ 邪馬台国への道・一支国を探る	講師：加藤謙一・安高啓明（当館研究員）・大石一久（長崎県文化振興課）
平成 22 年 10 月 27 日(水) 10：45 ～ 12：25	小値賀町立小値賀小学校 6 年（13 名）	江戸時代の長崎を知ろう	館側：加藤謙一（当館研究員） 学校側：下田幹子（当館研究員）
平成 23 年 3 月 3 日（木） 10：30 ～ 12：20	小値賀町立小値賀中学校 1 年（13 名）	江戸時代の長崎（オランダ・中国の交流）を知ろう	館側：加藤謙一（当館研究員） 学校側：下田幹子（当館研究員）
平成 23 年 6 月 23 日(木) 10：45 ～ 12：25	小値賀町立小値賀小学校 6 年（14 名）	江戸時代の長崎を知ろう	館側：加藤謙一（当館研究員） 学校側：下田幹子（当館研究員）
平成 24 年 2 月 23 日(木) 10：30 ～ 12：20	小値賀町立小値賀中学校 1 年（16 名）	南蛮貿易から鎖国まで	館側：加藤謙一（当館研究員） 学校側：下田幹子（当館研究員）
平成 24 年 6 月 27 日(木) 10：45 ～ 12：25	小値賀町立小値賀小学校 6 年（19 名）	江戸時代の長崎（オランダ・中国の交流）を知ろう	館側：下田幹子（当館研究員） 学校側：小熊佐智子（当館研究員）
平成 24 年 11 月 14 日(水) 10：30 ～ 12：20	小値賀町立小値賀中学校 1 年（16 名）	博物館の仕事と中国との交流について知ろう	館側：小熊佐智子（当館研究員） 学校側：下田幹子（当館研究員）
平成 25 年 6 月 14 日(金) 10：25 ～ 11：10	平戸市立度島小学校 6 年（16 名）	南蛮貿易から鎖国まで	館側：下田幹子（当館研究員） 学校側：小熊佐智子（当館研究員）
平成 25 年 6 月 14 日(金) 13：00 ～ 14：50	平戸市立度島中学校 2 年（14 名）	南蛮貿易から鎖国まで	館側：下田幹子（当館研究員） 学校側：小熊佐智子（当館研究員）
平成 26 年 3 月 6 日（木） 9：50 ～ 11：40	長崎県立対馬高校 国際文化交流コース 1・2 年（22 名）	対馬藩と朝鮮通信使について	館側：講師 . 岡本健一郎・進行：小熊佐智子（当館研究員） 学校側：竹内有理（当館教育普及リーダー）
平成 26 年 6 月 6 日（金） 10：25 ～ 11：10	平戸市立度島小学校 6 年（16 名）	南蛮貿易から鎖国まで	館側：出口幹子（当館研究員） 学校側：小熊佐智子（当館研究員）
平成 26 年 6 月 6 日（金） 13：35 ～ 15：25	平戸市立度島中学校 2 年（14 名）	南蛮貿易から鎖国まで	館側：古豊裕次朗（当館研究員） 学校側：小熊佐智子（当館研究員）

壱岐市立盈科小学校遠隔授業案

タイトル：長崎タイムカプセル

展示室：歴史文化展示ゾーン

過　程	過程の内容	時　間	カメラ･画像	学習活動	支援内容	具体的支援内容	支援活動の留意点
はじめに 【5分】		13:30～13:35 【5分】	指導者)町屋前から) 博物館画像(P)	指導者の挨拶 博物館の紹介	遠隔授業のねらいを共有させる		
Ⅰ.つかむ 【12分】	①学習課題を考える	13:35～13:45 【10分】	指導者(加藤) 大)「南蛮屏風」左隻(P) 小)「南蛮屏風」展示 大)「寛文長崎図屏風」(P) 小)「寛文長崎図屏風」展示	「南蛮屏風」と「寛文長崎図屏風」から、そこに描かれた町や人々の様子から気付いたことを発表する。	両資料の展示風景を交えて紹介するとともに、発問を通して、さまざまな服装をした人、つまり外国の人々が描かれていることに気付いてもらう。 **発問「絵の中に描かれた町や人の様子から気付いたことを自由に発表してください。」**	・「南蛮屏風」の紹介(制作年代等)。展示風景紹介。 ・「南蛮屏風」の拡大画像で気付いたことを発表してもらう。 ・「寛文長崎図屏風」の紹介。展示風景を紹介。 ・「寛文長崎図屏風」の拡大画像で気付いたことを発表してもらう。	パワーポイント画像に資料名(ルビ付き)と相当する年代を相対年代「今から約**年前」で明記
	②課題をつかむ	13:45～13:47 【2分】	大)指導者(加藤)	学習の課題「江戸時代の長崎はどのような町だったのか」を確認する。	生徒の発表内容を総合して、課題の確認につなげる。		
Ⅱ.しらべる 【3分】	③見通しを持つ	13:47～13:50 【3分】	大)見学先画像 小)指導者(加藤)	修学旅行の見学先で生まれた感想や疑問を思い出す。	江戸時代の長崎の様子を知る手がかりが見学先に残されていることに気付いてもらう。その上で、**「修学旅行で訪れた長崎の江戸時代の様子を調べていこう!」**と課題の具体化と授業への意欲を高める。見学先については画像で紹介する。	・出島、大浦天主堂、中華街、孔子廟、眼鏡橋、グラバー園、26聖人記念館の画像を映して子どもたちのイメージの具体化を図る。	感想シートの出島・出島資料館、大浦天主堂、中国歴代博物館、グラバー園が対象となるように留意する。
Ⅲ.ねりあげる① 【15分】	④発表しあう	13:50～14:00 【10分】	大)発表に応じて見学先画像 小)指導者(加藤)	見学先での感想や疑問を発表しあう。	学校側で子どもたちの発表内容をまとめる。		子どもたちの気づきや疑問が「キリスト教」、「オランダ」、「中国」という3つのキーワードにつながるように留意する。
	⑤中間のまとめ	14:00～14:05 【5分】	大)指導者(加藤)	当時の長崎がさまざまな国や文化との交流があったことやその中で特に「キリスト教」、「オランダ」、「中国」とのつながりが強かったことに気付く。	現場の教師と発表内容を整理して、3つのテーマにつなげていく。		
休　憩 【10分】		14:05～14:15 【10分】					
Ⅲ.ねりあげる② 【35分】	⑥博物館資料で具体化する	1415～14:18 【3分】	指導者(加藤)	3つのテーマに即して博物館資料を見ながら江戸時代の長崎の様子をより詳しく見ていくことを確認する。			
	⑥-1キリスト教	14:18～14:28 【10分】	大)「南蛮屏風」右隻(P) 大)踏絵(P) 大)シーボルト日本(P) 小)指導者(加藤)	長崎がキリスト教普及の先進地域であることや江戸時代は信仰が禁じられていたことを確認する。その上で26聖人記念館からは信仰を守り抜いた末に命を落とした人々がいたこと、また、大浦天主堂は数百年間にわたり陰で信仰を守り伝えてきた人々がいたことを象徴する場所であることを知る。	・「南蛮屏風」に南蛮寺や日本人キリシタンが描かれていることや当時の教会の遺跡が市内に数多く残されていることから、長崎が当時、日本でもキリスト教をさかんに受け入れていたということを知ることができるようにする。 ・踏絵が何に使われていたのかを問いかける。 ・実際の使用風景がわかるシーボルト「日本」を紹介し、江戸時代の日本ではキリスト教を信じることが禁止されていたことの理解につなげる。 ・「信仰を守った」エピソードとして26聖人と大浦天主堂を紹介する。		
	⑥-1キリスト教	14:18～14:28 【10分】	大)「南蛮屏風」右隻(P) 大)踏絵(P) 大)シーボルト日本(P) 小)指導者(加藤)	長崎がキリスト教普及の先進地域であることや江戸時代は信仰が禁じられていたことを確認する。その上で26聖人記念館からは信仰を守り抜いた末に命を落とした人々がいたこと、また、大浦天主堂は数百年間にわたり陰で信仰を守り伝えてきた人々がいたことを象徴する場所であることを知る。	・「南蛮屏風」に南蛮寺や日本人キリシタンが描かれていることや当時の教会の遺跡が市内に数多く残されていることから、長崎が当時、日本でもキリスト教をさかんに受け入れていたということを知ることができるようにする。 ・踏絵が何に使われていたのかを問いかける。 ・実際の使用風景がわかるシーボルト「日本」を紹介し、江戸時代の日本ではキリスト教を信じることが禁止されていたことの理解につなげる。 ・「信仰を守った」エピソードとして26聖人と大浦天主堂を紹介する。		

	⑥-2オランダ	14:28～14:38 【10分】	大)出島図)P) 大)漢洋長崎居留図巻)P) 大)拡大画像1)P) 大)拡大画像2)P) 大)拡大画像3)P) 小)指導者(加藤)	出島に住んでいたのがオランダ人であることと彼らの出島での生活を知るとともに日本に伝わったオランダ文化を確認する。	・出島図で子どもたちの記憶とつなげる。<u>発問「みんなが行った出島と比べてみてどうですか?」</u> ・阿蘭陀屋敷絵図を見ながら出島でのオランダ人の生活を見ていく。 →日本人が裸足や足袋であるのに対して、畳の上で上履きを履いている。家具は西洋風。孔雀、サル、ダチョウ。ビリヤードやバドミントンなど。	・出島の広さ(1万5000平方メートル)を盈科小学校の校庭の広さと比較して、その大きさを実感してもらう。 ・絵図からの子どもたちの気づきを、出島見学時の感想や経験とつなげることに留意する。	
			貿易品の値段当てコーナーへ移動				
			大)漢洋長崎居留図巻拡大(P)	オランダとの貿易でもたらされた孔雀の値段当てクイズをおこなう。	・3択式で答えを提示して会場の先生に子どもたちの答えを集約してもらい解答してもらう。		
			町屋へ移動				
	⑥-3中国	14:38～15:48 【10分】	大)長崎港之図)P) 大)唐館蘭館図絵巻)P) 大)漢洋長崎居留図巻)P) 小)指導者(加藤)	長崎には中国人が住む唐人屋敷があったことやそこでの暮らしを知るとともに、そうした中国との深い結びつきの先に現在の中華街や孔子廟があることを確認する。	・出島と同じように新地蔵が海を埋め立てて建てられていること、オランダ人にとっての出島とおなじように中国人が生活する場所として唐人屋敷を伝える。 ・唐人屋敷の中での生活を絵図を通じて確認する。		
			大)指導者(加藤) 大)月琴画像(P) 小)指導者(加藤)	実際に月琴を体験して、中国文化に親しむ。	・月琴を4名程度に音を出してもらったあとに、写真で実際の持ち方を確認するとともに演奏音源で楽器の音を確認。		
	⑦まとめ	14:48～14:50 【2分】	大)指導者(加藤)	長崎は江戸時代を中心に海外との交流が盛んだった。そうした歴史は、博物館が持っている資料と同時に、今も町のあちこちに残るたくさんの建物や記念碑をとおして知ることができる。			
Ⅳ.ふりかえる 【7分】	⑧ふりかえる	14:50～14:57 【7分】	大)指導者(加藤)	・「江戸時代の長崎はどのようなまちだったか」という課題に対して、子どもたちが見つけ出した結論(感想)を発表してもらいながら学びを共有する。 ・最後になぜ長崎で外国との交流が盛んだったのか、それ以外の地域はどうだったのかという疑問を投げかけて、2学期以降の授業への動機付けをおこなうとともに、歴史的視点を養う機会とする。			
終わりに 【3分】		14:57～15:00 【3分】	大)指導者全員	終わりの挨拶			

小値賀中学校遠隔授業案

タイトル：博物館の仕事と中国との交流について知ろう

連携教科：総合（職業選択）、総合学習　２時間（50 分× 2）

1 時間目：博物館の仕事を知る

2 時間目：福建博物院展を通じて、小値賀の歴史を学ぶ

展示室：福建博物院展（３階企画展示室）

内容	時間	学習活動	支援内容	先生による支援
はじめに	5分	指導者挨拶 趣旨説明	①遠隔授業のねらいを共有させる。	
博物館紹介	7分	写真や現場からの中継映像を用いて博物館の概要や展示室の雰囲気を紹介する。	①博物館へのイメージの具体化を図る。	
博物館の機能を知る	8分	「収集・保管」、「調査・研究」、「展示・教育」という3大機能を知る。	①画像や館からの映像を通して、博物館には「資料」が不可欠なものであることを知る。 ②資料と関わりの深い３大機能を担う仕事を司っているのが学芸員であることを理解する。	
資料カードの作成を体験する	20分	自分にとっての大切な宝物（当日持参）に関する資料カードを作成。	①資料の情報整理作業を、身近なモノに関する資料カード（前日までに用意）作りを通じて体験し、学芸員業務の一端に触れる。	
まとめ	10分	博物館における資料の位置づけを確認する。	①自分の大切なモノを再度「資料」として捉えたことを確認する。 ②博物館資料にも使っていた人の大切な思いが詰まっている。 ③モノに備わる情報を読み取り整理することで、博物館資料として活用できる。	
休憩	10分			
導入	10分	指導者自己紹介 福建博物院展の紹介	指導者である学芸員の人物像と研究テーマを知る。福建博物院展の意図を伝える。	
資料を読み解く	30分	小値賀からの出土品と福建博物院コレクションを比較しながら紹介。	指導者とともに生徒も参加しながら資料を読み解いていけるような学習環境づくりに留意する。 それぞれの資料を比較することで、小値賀が中国との交流において、重要な位置にあったことを資料から理解する。	
まとめ	10分	①資料（モノ）にはどんなものにもいろいろな情報が刻まれていることと、学芸員という仕事の一つに、モノの情報を読み解き、展示するという活動があることを知る。	①収蔵資料から様々な情報を読み解くということと1時間目の資料カードでモノの情報を記録するという作業の共通性に気づく。	

歴文博が遠隔授業

江戸時代の長崎テーマ　壱岐の盈科小に

長崎市立山一丁目の長崎歴史文化博物館は八日、テレビ会議システムを利用し、壱岐市郷ノ浦の盈科（えいか）小（松嶋幸弘校長、三百六十九人）と双方向の遠隔授業をした。小学校を対象にした遠隔授業は初めて。

同館展示室と県立壱岐高コモンホールをテレビ電話で結び、同館の研究員と同小の六年生が互いの映像を見ながら授業をした。

授業のテーマは「江戸時代の長崎」。研究員は江戸中期の長崎を描いた「寛文長崎図屏風」などの展示品を見せ、長崎奉行所や出島などについて説明。それを見た児童は「出島はなぜ扇子のような形をしているのか」「眼鏡橋はどうして造られたのか」などと盛んに質問していた。

長崎歴文博は二〇〇六年二月以来、県立壱岐高を対象に遠隔授業を実施中。壱岐以外でも通信環境が整う地域なら、来年度以降にも遠隔授業は可能という。

テレビ会議システムで児童の姿を見ながら展示品の説明をする研究員＝長崎歴文博

2008.7　長崎新聞

長崎歴博と小値賀中

ネットで遠隔授業

「郷土史にも興味持って」

長崎市の長崎歴史文化博物館は3日、館内と小値賀町の小値賀中学校をインターネットで結び、遠隔授業を行った。同館を利用する機会が少ない離島の子どもたちに、館内の資料や展示品を知ってもらおうと2006年から毎年2回行っている。この日は職員がテレビ映像を通じ、出島や唐人屋敷など「江戸時代の長崎」について解説した。

同館の下田幹子研究員は「これを機に長崎の歴史だけでなく、小値賀の郷土にも関心を持ってもらえれば」と話していた。

モニター画面に映る小値賀中生徒を見ながら江戸時代の長崎について説明する長崎歴史博物館の研究員

2011.3.4　西日本新聞

小値賀中で遠隔授業

長崎の博物館から中継

五島列島の北、小値賀島で、小値賀町立小値賀中（森田美智子校長、61人）の1年生13人が3日、長崎歴史文化博物館（長崎市）と教室をインターネットのテレビ会議システムで結んだ「遠隔授業」を受けた。展示室の研究員とライブ中継で会話しながら、世界に開かれた江戸時代の長崎について学んだ。

地理的事情でめったに見学の機会のない子どもたちに展示に触れてもらおうと、同館が5年前始めた試みで、離島では壱岐に続く実施だ。

博物館から下田幹子研究員が唐人屋敷やオランダ船の模型を中継で見せながら解説。会場の小値賀小で加藤謙一研究員が、博物館から持ち込んだサメの皮や沈香などの交易品を、実際に生徒たちに触らせた。

下田さんは、欧州への重要な輸出品だった「青貝細工」の展示品を見せ、同種のものが町内の資料館にもあると紹介。クジラ漁で栄えた当時の島の豪商の財力を説明した。授業を聞き終えた山内健輔君（13）は「長崎だけじゃなく、身近な小値賀にもすごい歴史があるんだ」と興味がわいてきた」と話した。

モニターの向こうの長崎歴史文化博物館の研究員に足され、江戸時代の重要な交易品ここナメ皮をさ

2011.3.4　朝日新聞

歴文博 —— 小値賀中

ネットで遠隔授業

中国との交流 映像で学ぶ

長崎市立山1丁目の長崎歴史文化博物館は14日、北松小値賀町中村郷の町立小値賀中（吉原幹男校長、51人）の1年生19人を対象に、テレビ会議システムを使った遠隔授業をした。

遠隔授業は、離島など博物館に来館するのが困難な学校を対象に2006年から実施。同館と中学校のパソコン室をインターネット回線で結び、同館研究員と生徒が互いに映像を見ながら授業をした。

授業のテーマは「博物館の仕事と中国との交流について知ろう」。研究員が博物館の役割を説明したほか、現在開催中の企画展「中国福建博物院展」をカメラを持って案内。小値賀周辺の海底から出土し、企画展で展示されている中国・福建製の陶磁器や碇石（いかりいし）などが紹介され、生徒は小値賀と中国の関わりを学んだ。

授業後、川口梨花さん（13）は「実物を見ながら勉強できたので面白かった。博物館にはたくさんの資料が収蔵されていることが分かった」と話した。（宮本宗幸）

企画展の映像を見ながら中国と小値賀の関わりについて学ぶ生徒たち＝小値賀町立小値賀中

小値賀周辺海底で出土　福建製陶磁器など紹介

2012.11.15　朝日新聞

2. 出張授業

平成 26 年度出張授業実施概要

1. 目的

長崎歴史文化博物館の研究員が学校に出向き、当館の見学にともなう事前事後学習に役立つような学習の機会を提供します。また、当館への来館が困難な学校に対する教育普及活動の一環として実施します。

2. 内容

当館の研究員が特定のテーマを取り上げて、当館の所蔵資料のレプリカや学習素材を学校に持ち込み授業をおこないます。テーマは先生方との打ち合わせに基づき決定します。なお、授業に際して先生方にも子どもたちの発言をひろったり、板書などの授業作りの支援をお願いします。

3. 対象

県内の学校等

＊9月から11月の繁忙期にはご希望に添えない場合もございます。あらかじめご了承ください。

4. 実施期間

2014年5月～2015年3月

5. 対応人数

一度に対応できる人数は40名程度を目安としています。それ以上の人数で実施を希望される場合はご相談ください。

6. 実施時間

内容に応じて授業1時間分（45分～60分）から対応します。

6. その他

移動博物館の実施に係る費用（旅費、運搬費等）はすべて博物館が負担します。館用車で伺いますので、駐車場（1台分）の確保をお願いいたします。

7. 申込み方法

まずは教育普及グループ（095-818-8366）宛にお電話をいただき、希望される日時、場所、内容などをご相談ください。申込みは1ヶ月前までにお願いいたします。

出張授業実績

平成 21 年度

日　時	対　象	授業テーマ	講師
7月16日(木) 10:30～12:10	長崎市立畝刈小学校 6年生　140名	南蛮貿易と日本文化について	加藤謙一・下田幹子
9月15日(火) 14:05～15:40	長崎市立晴海台小学校 6年生　28名	長崎歴史文化博物館ってどんなところ？	加藤謙一
9月24日(木) 14:05～15:40	長崎市立晴海台小学校 6年生　28名	キリシタンの取り締まり、鎖国、出島(出島パズル)	下田幹子
10月1日(木) 10:00～12:00	長崎市立日見小学校 6年生　70名	見て、さわって、想像しよう(出島パズル、出島の貿易品・解体新書)	加藤謙一・久保憲司・下田幹子

平成 22 年度

日　時	対　象	授業テーマ	講師
7月12日(月) 13:00～13:45	長崎県立希望が丘高等特別支援学校2年生　11名	出島の生活を知ろう(出島パズル)	加藤謙一・下田幹子
9月10日(金) 12:55～14:55	長崎大学教育学部附属中学校 2・3年生　31名	モノから歴史と文化を紡ぎ出す―博物館学芸員の仕事最前線―(前編)博物館の「資料」と「展示」のヒミツ	加藤謙一・下田幹子
9月13日(月) 10:40～11:25	長崎市立虹が丘小学校 6年生　35名	鎖国、出島の生活(出島パズル)	加藤謙一・下田幹子
9月15日(水) 12:55～14:55	長崎大学教育学部附属中学校 2・3年生　31名	モノから歴史と文化を紡ぎ出す―博物館学芸員の仕事最前線―(後編)	加藤謙一
9月17日(金)	長崎市立村松小学校 4・6年生　160名	企画展「実録・坂本龍馬展関連事業」	深瀬公一郎・一瀬勇士
9月21日(火) 12:55～14:55	長崎大学教育学部附属中学校 2・3年生　30名	モノから歴史と文化を紡ぎ出す―博物館学芸員の仕事最前線―(前編)博物館の「資料」と「展示」のヒミツ	加藤謙一
9月22日(水)	長崎県立長崎明誠高等学校 郷土研究講座選択者　30名	企画展「実録・坂本龍馬展関連事業」	深瀬公一郎・一瀬勇士
9月24日(金)	長崎大学教育学部附属中学校 2・3年生　30名	モノから歴史と文化を紡ぎ出す―博物館学芸員の仕事最前線―(後編)古文書から歴史を読み解く	
9月24日(金)	長崎市立畝刈小学校 6年生　118名	キリスト教の伝来から禁教と鎖国	加藤謙一・下田幹子
10月6日(水)	長崎市立深堀小学校 6年生　85名	鎖国、出島の生活(出島パズル)	加藤謙一・下田幹子
10月15日(金) 10:00～12:00	長崎市立日見小学校 6年生　80名	見て、さわって、想像しよう(出島パズル、出島の貿易品・解体新書、上野彦馬)	加藤謙一・下田幹子・一瀬勇士
10月20日(水)	長崎市立稲佐小学校 6年生　60名	企画展「実録・坂本龍馬展関連事業」	一瀬勇士
10月20日(水)	長崎市立緑ヶ丘中学校 2年生　142名	企画展「実録・坂本龍馬展関連事業」	深瀬公一郎・一瀬勇士
10月27日(水)	長崎県立野母崎高等学校 3年生　24名	企画展「実録・坂本龍馬展関連事業」	深瀬公一郎・一瀬勇士
10月28日(水) 9:55～11:35	活水高等学校 2・3年(日本史選択)　48名	企画展「実録・坂本龍馬展関連事業」	一瀬勇士
11月10日(水) 12:55～14:55	長崎大学教育学部附属中学校 2・3年生　30名	モノから歴史と文化を紡ぎ出す―博物館学芸員の仕事最前線―(前編)博物館の「資料」と「展示」のヒミツ	
11月15日(月) 12:55～14:55	長崎大学教育学部附属中学校 2・3年生30名	モノから歴史と文化を紡ぎ出す―博物館学芸員の仕事最前線―(後編)オランダと長崎	
11月17日(水) 12:55～14:55	長崎大学教育学部附属中学校 2・3年生　30名	モノから歴史と文化を紡ぎ出す―博物館学芸員の仕事最前線―(前編)博物館の「資料」と「展示」のヒミツ	
11月22日(月) 12:55～14:55	長崎大学教育学部附属中学校 2・3年生　30名	モノから歴史と文化を紡ぎ出す―博物館学芸員の仕事最前線―(後編)いまも長崎にのこる中国文化	

平成 23 年度

日　時	対　象	授業テーマ	講師
4月18日(月) 10:55～12:00	西海市立瀬戸小学校 6年生　29名	歴史を学ぶ楽しさを伝える	加藤謙一・下田幹子
6月29日(水) 10:40～11:30	佐世保市立宇久中学校 1・2年生　25名	長崎が生んだ偉大な写真師　上野彦馬を知ろう	加藤謙一・下田幹子
7月7日(木) 11:30～12:40	聖和女子学院中学校 1・2年生　53名	キリスト教の伝来から禁教と鎖国	加藤謙一・下田幹子
9月8日(水) 10:20～14:50	長与町立長与南小学校 6年生　171名	博物館で本物を見てみよう	加藤謙一・下田幹子
12月16日(金) 13:30～15:00	川棚町立小串小学校 6年生　56名	出島の生活を知ろう(出島パズル)	加藤謙一・下田幹子
12月21日(水) 10:00～12:00	長崎市立日見小学校 6年生　88名	出島パズル、総合「長崎よかとこ　こんなとこ」質問タイム	加藤謙一・下田幹子
1月24日(火)	活水高等学校 3年生　28名	長崎版画体験	加藤謙一・下田幹子
3月19日(金)	五島市立本山小学校 5年生　25名	出島の生活を知ろう(出島パズル)	加藤謙一・下田幹子

平成 24 年度

日　時	対　象	授業テーマ	講師
6月8日(金) 9:10～10:45	長崎市立女の都小学校 6年生　47名	長崎ってどんな町？	下田幹子・小熊佐智子
9月11日 10:20～14:50	長与町立長与南小学校 6年生　150名	博物館で本物を見てみよう	下田幹子・小熊佐智子
8月30日(木) 14:30～15:20	純心女子高等学校 1年生　253名	幕末・明治の長崎	岡本健一郎
9月28日(金) 11:15～12:00	佐世保市立江迎小学校 6年生　26名	出島の生活を知ろう(出島パズル)	下田幹子・岡本健一郎
9月28日(金) 13:50～15:30	佐世保市立猪調小学校 6年生　20名	出島の事について詳しくなろう！博物館の宝物に触れよう	下田幹子・岡本健一郎
10月22日(月) 13:55～14:40	聖マリア学院小学校 6年生　12名	幕末・明治の長崎について	下田幹子
11月2日(金) 9:40～12:15	長崎市立深堀小学校 6年生　84名	出島の貿易、出島の生活	下田幹子・一瀬勇士
1月23日(水) 14:30～15:20	活水高等学校 3年生　39名	長崎版画体験	下田幹子・小熊佐智子
3月11日(月)	活水高等学校 2年生　32名	坂本龍馬と幕末長崎	一瀬勇士

平成 25 年度

日　時	対　象	授業テーマ	講師
6月3日(月) 14:05～15:40	長崎市立村松小学校 6年生　62名	ふるさと歴史散歩の導入として	下田幹子・小熊佐智子
9月6日(木) 13:55～14:40	佐世保市立江迎小学校 6年生　32名	絵巻から出島の様子を知ろう	下田幹子・古豊裕次朗
9月13日(金) 14:15～15:05	長崎市立東長崎中学校 2年生　49名	坂本龍馬と長崎	小熊佐智子・古豊裕次朗
9月5日(木) 10:00～11:40	長崎市立女の都小学校 6年生　38名	長崎の歴史と外国との結びつき	下田幹子・小熊佐智子
9月27日(金) 13:50～15:30	佐世保市立猪調小学校 6年生　20名	江戸時代の長崎・出島の様子、蘭学について	下田幹子・古豊裕次朗
10月9日(水) 13:15～15:05	長崎県立桜が丘特別支援学校 2・3年生　6名	江戸時代の長崎貿易	下田幹子・小熊佐智子
10月23日(水) 10:35～12:25	長崎市立緑ヶ丘中学校 ３年生　57名	国際理解	小熊佐智子・古豊裕次朗

12月4日(金) 14:00～17:00	活水高等学校	長崎版画	下田幹子・小熊佐智子

平成２６年度

日　時	対　象	授業テーマ	講師
6月3日(月) 14:05～15:40	長崎市立村松小学校 6年生　62名	ふるさと歴史散歩の導入として	出口幹子・小熊佐智子
7月3日(木) 13:25～14:10	活水高等学校 3年生　38名	長崎と中国との関係、長崎版画	小熊佐智子・出口幹子
7月4日(金) 9:35～12:25	諫早市立明峰中学校 2年生　98名	蘭学と化政文化、暮らしの変化について	出口幹子・小熊佐智子
7月17日(木) 14:50～15:40	長崎大学教育学部附属中学校 3年生　142名	諸外国と日本の交流の歴史と長崎	小熊佐智子
9月4日(木) 10:20～14:50	長与町立長与南小学校 6年生　170名	博物館で本物をみよう	出口幹子・小熊佐智子
9月5日(金) 10:00～11:40	長崎市立女の都小学校 6年生　38名	江戸時代の長崎について	出口幹子・小熊佐智子
9月18日(木) 14:05～14:50	佐世保市立江迎小学校 6年生　32名	江戸時代の長崎について	出口幹子・古豊裕次朗
9月26日(金) 13:50～15:30	佐世保市立猪調小学校 6年生　23名	江戸時代の長崎と蘭学について	出口幹子・大石美織
11月17日(月) 10:30～11:15 11:25～12:10	島原市立湯江小学校 6年生　59名	島原藩と長崎の関わりについて	出口幹子・一瀬勇士
1月15日(水) 10:05～11:40	長崎市立川原小学校 6年生　13名	絵巻から出島のようすを知ろう	出口幹子
2月6日(金) 14:10～15:40	長崎市立川原小学校 6年生　13名	長崎版画について	出口幹子・一瀬勇士

長崎市立女の都小学校出張授業案

2013 年9 月5 日（木）　　10 :00 ～10 :45、10 :55 ～11 :40
6 年生2 クラス
担任：植木先生　　館側担当：下田・古豊

●れきぶんが大切に保管している「長崎の宝物」を長崎の歴史に引きつけて紹介し、自分たちの住む長崎が江戸時代を通じて海外との窓口であったことと、それが日本のなかでもとてもユニークで重要な位置にあったことを再確認する機会とする。
●授業の進め方は、「長崎の宝物」からさまざまな情報を発見すること、その情報が歴史につながることを出来る限り経験的に実感できるように双方向となるよう心がける。また、体験できる資料も用意して五感で歴史を学べるよう心がける。

1. 当日の流れ
①自己紹介・博物館紹介　5 分
・長崎歴史文化博物館→「れきぶん」と呼んで！
・長崎の昔のことが分かる「大切な宝物」、約48000 点がおかれていて、みんなが見ることができるようにかざってある場所。
＊れきぶんには長崎の昔を知ることの出来る「宝物」がたくさんあるところであること。その宝物を調べていろいろな歴史を発見する仕事をしているのが「学芸員」と呼ばれる人たちで、私たちも学芸員であること。今日の授業では学芸員が宝物から隠された情報をどのように発見して歴史を読み取っているのかをみなさんにも体験してもらいながら、長崎の歴史的特色を再確認してもらうのが目的であることを共有する。

②自分たちが知っている観光地と「外国との交流」をつなげる　10 分
＊1 学期のパンフレット作成を参考に。
・出島
・グラバー園、オランダ坂
・眼鏡橋
・大浦天主堂
が「オランダ・中国・ポルトガル」の3 つの国の影響を受けているもの　　が多いことに気付く。
③それぞれの国と長崎がどんな関わりがあるのかを博物館の資料を通して読み解く。20 分
●南蛮屏風（ポルトガル人）　＊教会など
・「南蛮人カード」を配布し、自分のカードの人物や動物がどこにいるか探す。
＊数名、自分のカードの人がどこにいるか、どんな特徴があるのかを発表する。
・織田信長や豊臣秀吉の頃の長崎の様子を描いた絵であることを説明
・長崎はどんな町だったか？どんな人がいたか？何をしている場面かを読み解いていく。
→貿易とキリスト教が一緒に入ってきたことに気付く
・時間があれば･･･ 言葉を紹介
＊ポルトガルから伝わった言葉　テンプラ・カステラ・コンペイトウ・ビスケット・ズボン・ボタン・カルタなど
＊ポルトガルになった日本語
カタナ（刀）・シャ（茶）・フネ（船）・サケ（酒）・ビョンボ（屏風）・キモン（着物）
●長崎港之図（オランダ、中国）
・江戸時代の長崎港の様子を描いた絵であることを説明
→オランダ人が暮らす出島、中国人が暮らす唐人屋敷などを読み解いていく。

＊当時の長崎はヨーロッパや中国の情報が入ってくる窓口だったので、多くの人にとって長崎はあこがれの町だった。

→坂本龍馬やグラバーも長崎を訪れた1 人。

④まとめ　5 分

・長崎は特別な場所だった。

→詳しく調べると面白いことがたくさんわかるので、じっくり調べてみよう

→9/12 に行う博物館見学と町歩きへの興味・関心を高める。

佐世保市立江迎小学校出張授業案

2014年9月18日（木）　　14：05～14：50
6年生
担任：山田先生・伊藤先生　　館側担当：出口・古豊

＊準備するもの
「長崎港之図」、「出島パズル」、「出島絵巻」（紙焼）、養生テープ
1.当日の流れ
①江迎ってどんな町？（学校側）　5分
・導入として自分たちが住む「江迎」が江戸時代、どんな町だったのかを紹介する。
②自己紹介・博物館紹介　3分
③「長崎港之図」を見ながら江戸時代の長崎について学ぶ。5分
・江戸時代、長崎ではどこの国と貿易をしていた？
・出島（オランダ人）、中国人（唐人屋敷）が住んでいた場所や、船についてクイズを出しながら、絵を読み解く。
②グループで「出島パズル」を制作　10分
・出島パズルを制作
・完成後にグループで「人物」「動物」「建物」「それ以外」に分けて、疑問や質問、気づきをグループで共有する。
③出島パズルの気づきを発表する。　10分
・黒板に出島パズルの元になった絵巻物を掲示する。「人物」「動物」「建物」「それ以外」で発表する。
④こどもたちの気づきを拾いながら、出島での生活の様子について解説。　10分
⑤修学旅行へのつなぎ　2分
・グラバーや坂本龍馬を紹介し、現在の長崎にあるグラバー園や亀山社中などの歴史的な場所が残っている琴を紹介し、修学旅行につなげる。

2010.9.18 長崎新聞

クイズで龍馬学ぶ

村松小で出前授業

長崎市琴海村松町の市立村松小（井邑健一校長、467人）で17日、出前授業「龍馬が生きた時代へタイムスリップ！」（ＮＨＫ長崎放送局主催、長崎新聞社など協力）が開かれ、児童らがクイズなどを通じて、坂本龍馬や幕末などについて学んだ。

10月２日から同市立山１丁目の長崎歴史文化博物館で開かれる「2010年ＮＨＫ大河ドラマ特別展 龍馬伝　実録坂本龍馬展」に合わせて、龍馬に関心を持ってもらおうと実施。同博物館の深瀬公一郎研究員が講師を務め、４、６年生の計約140人が参加した。

深瀬研究員はスライドを使って龍馬の家族構成や人柄などについて説明。「子どものころの龍馬はどんな人」「黒船に乗ってアメリカからやってきたのは」などのクイズも出題され、子どもたちは楽しみながら龍馬が生きた時代について理解を深めた。６年の中村真代さん(12)は「クイズなどで分かりやすく知らないことを学べて楽しかった」と話した。

（戸羽信介）

クイズに答える子どもたち　＝長崎市立村松小

2010.9.18　長崎新聞

楽しい！肌で歴史〝体感〟

歴文博研究員 南蛮貿易品使い出張授業

畝刈小

長崎市京泊1丁目の市立畝刈小（大串正弘校長）でこのほど、「江戸時代の長崎」をテーマにした長崎歴史文化博物館の〝出張授業〟があり、6年生126人が長崎の歴史を楽しく学んだ。

学校教育への博物館の活用などを考える「協力校・パートナーズプログラム」の一環。同校では昨年に続き2回目。

講師は同博物館の研究員、加藤謙一さん(36)。同館所蔵の南蛮屏風（びょうぶ）の写真を見せ、中に描かれている物をクイズ形式で質問。南蛮貿易で取引されたヒョウの毛皮や絹、象牙のレプリカのほか、踏み絵のレプリカも登場し、子どもたちは肌触りや重さを確かめていた。

当時の長崎が描かれた絵図の写真を示しながら「このころ外国の情報は、出島や唐人屋敷がある長崎にしか入ってこなかった。長崎はすごい所だったんだ」と加藤さん。同校の井口瑞稀さん(11)は「史料の実物を見ることができて楽しかった」と感想を話した。

（後藤洋平）

ヒョウの毛皮を興味深そうに触る児童　＝長崎市、畝刈小

2010.10　長崎新聞

3. 移動博物館

平成 26 年度移動博物館実施概要

1. 目的

長崎歴史文化博物館の展示や活動について県民市民のみなさまに広く知っていただくとともに、長崎の歴史文化に対する興味関心を深めてもらうことを目的とします。特に、遠隔地やその他の理由により来館が困難な方々を対象に、長崎歴史文化博物館の活動に触れていただく機会を提供します。

2. 内容

当博物館のコレクション（複製含む）や体験型資料、パネル等を使った移動展示を行います。当館研究員による解説や体験講座もできます。

3. 対象

県内の学校、公民館、福祉施設等

4. 実施期間

2014 年5 月～2015 年3 月

5. 開催日当日のスケジュール

会場設営　　2 時間
開催時間　　2 時間～3 時間
撤収　　1 時間
※原則、開催は2 時間から1 日までとしますが、希望に応じて数日間開催することも可能です。

6. その他

移動博物館の実施に係る費用（旅費、運搬費等）はすべて博物館が負担します。ただし体験プログラムのよっては、参加費を徴収させていただく場合もあります。
展示に必要な机、椅子、パネル等の什器は申請者に提供していただきます。

7. 申込み方法

まずは教育普及グループ（095-818-8366）宛にお電話いただき、希望される日時、場所、内容などをお伝えください。申込みは1 ヶ月前までにお願いいたします。（先着順）

移動博物館実績

平成20 年度

日　時	会　場	対　象	参加者数
12月9日(火) 13:30～14:30	ケアハウス稲佐の森(長崎市)	入所者	200名
2月9日(月) 11:40～15:55	長崎市立晴海台小学校	1～6年生	180名
2月27日(金) 14:00～17:00	軽費老人ホームサンライフ(大村市)	入所者、通所者	61名

平成22 年度

日　時	会　場	対　象	参加者数
6月11日(金) 11:35～15:40	長崎市立村松小学校	1～6年生、保護者	500名
7月12日(月) 10:25～13:45	長崎県立希望が丘高等特別支援学校	1～2年生	90名
3月25日(金) 10:00～11:00	老人ホーム　アンムート櫻馬場 (長崎市)	入所者	24名

平成23 年度

日　時	会　場	対　象	参加者数
6月29日(水) 9:40～16：30	佐世保市立宇久中学校	1～3年生、保護者	60名
9月6日(木) 9:35～15:00	長与町立長与南小学校	1～6年生	300名
11月13日(日) 11:00～14:00	長崎県立小浜高等学校	1～3年生、文化祭観覧者	200名
12月16日(金) 11:00～14:00	特別養護老人ホーム　くじゃくの家 (東彼杵郡東彼杵町)	入所者、東彼杵町立小串小学校6年生、地域住民	100名
3月9日(金) 10:20～13:30	五島市立本山小学校	1～5年生	180名

平成24 年度

日　時	会　場	対　象	参加者数
9月11日(火) 9:00～15:00	長与町立長与南小学校	6年生、1～5年(自由見学)	500名
9月12日(水) 10:40～15:00	佐々町立口石小学校	6年生、1～5年生(自由見学)	320名
11月10日(土) 11:00～14:00	長崎県立小浜高等学校	1～3年生、文化祭観覧者	100名
1月12日(土)～14日(月)	小値賀町立歴史民俗資料館	来館者	101名
1月26日(土) 10:00～16:20	鷹島スポーツ・文化交流センター	シンポジウム参加者	400名
2月9日(土)～11日(月) 9:00～17:00	壱岐市立一支国博物館	来館者	243名
3月7日(木)～4月7日(木) 10:00～18:00	大村市立史料館	来館者	580名

平成25 年度

日　時	会　場	対　象	参加者数
9月3日(火) 8:45～14:50	長与町立長与南小学校	6年、1～5年(自由見学)	300名
9月20日(金) 10:40～15:00	佐々町立口石小学校	6年、1～5年(自由見学)	300名
2月8日(土)～2月9日(日) 9:00～17:00	壱岐市立一支国博物館	来館者	170名

平成26 年度

日　時	会　場	対　象	参加者数
9月18日(木) 11:25～14:50	佐世保市立江迎小学校	5年生、他学年(自由見学)	190名
9月26日(金) 11:15～15:30	佐世保市立猪調小学校	5・6年生、1～4年生(自由見学)	115名
11月17日(月) 10:40-11:25	島原市立湯江小学校	6年生、1～5年生(自由見学)	59名
12月10日(水) 10:30～15:00	佐世保市立日野小学校	6年生、1～5年生(自由見学)	135名

佐世保市立日野小学校　移動博について

○期日：2014 年12 月10 日（水）
○場所：佐世保市立日野小学校　体育館
〒858-0923　佐世保市日野町1308 番地
TEL: 0956-28-4358　FAX: 0956-28-4359
○対象：６年生３クラス
○当日の流れ

	７：３０～９：３０	博物館→日野小学校　移動
	９：３０～１０：３５	設営（体育館）
３校時	１０：３５～１１：２０	６－１見学
４校時	１１：３０～１２：１５	６－２見学
	１２：１５～１４：０５	給食・昼休み・掃除
		＊昼休み他学年の見学あり
５校時	１４：０５～１４：５０	６－３見学
	１４：５０～１６：００	撤収
	１６：００～１８：００	日野小学校→博物館　移動

○学校からの要望
・歴史のまとめ学習としての位置づけ
・日本の歴史の中で長崎の関わりについて深く学びたい
・佐世保の資料のあれば嬉しい。

○学校担当　田中英明先生（パートナーズ）
○博物館担当　出口・一瀬

移動博物館　展示資料の一例

南蛮人来朝之図

踏絵図と踏絵

長崎港之図

寛文長崎図屏風

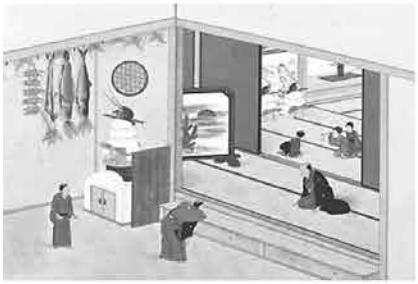
出島･唐人屋敷のようす

漢洋長崎居留図巻

出島･唐人屋敷パズル

解体新書

眼鏡橋づくり


年中行事絵

貿易品体験

浮世絵

ペリー、黒船

カメラ

横浜絵

長崎歴史文化博物館

〝初出前〟ケアハウスに

利用者ら「懐かしい」

絵画・古写真など20点

長崎歴史文化博物館（長崎市立山1丁目）は9日、所蔵品を館外で公開する初めての「移動博物館」を、同市大谷町の老人福祉施設ケアハウス稲佐の森で開いた。利用者ら約160人が、昔の長崎の街並みや暮らしぶりを描いた絵画や古写真など約20点を鑑賞した。

職員の説明を聞きながら作品を鑑賞するお年寄りら＝長崎市大谷町

移動博物館は、病院や福祉施設に入っていたり、離島に住んでいたりして普段は来館できない人のために企画。今回の展示品には、江戸時代の絵師、川原慶賀が長崎の年行事を描いたシリーズや、幕末のオランダ特使、リンテンが残した挿絵が並んだ。稲佐の森近くの悟真寺が描かれた作品もあり、その絵を目にした女性は「この建物は取り壊されてしまったが、とても懐かしい」と話した。

市内の男性（77）は、長崎港を写した古写真を見つめ、「今は埋め立てが進み、大きく変わってしまったが、やはり昔の港は良い。博物館には行ったことがなかったので、ありがたい」と話した。

会場には、長崎版画や折り紙を体験するコーナーも設けられた。お年寄りたちは、職員や博物館ボランティアに教わりながら、絵筆で色とりどりの作品を描いた。

長崎歴史文化博物館は年明けにも大村市内の施設で移動博物館を開き、新年度も数カ所での開催を予定している。大堀哲館長は「博物館は社会とのつながりを持っていかなければと考えている」と話した。

2008.12.10　朝日新聞

〝博物館〟がやって来た

長崎歴文博 初の移動展

20点展示、「長崎版画」手ほどきも

長崎歴文博所蔵の資料に見入るお年寄り＝ケアハウス稲佐の森

高齢者福祉施設に

長崎市立山一丁目の長崎歴史文化博物館は九日、同市大谷町の高齢者福祉施設「ケアハウス稲佐の森」で、開館以来初めての移動展「れきぶん移動博物館」を実施した。

体が不自由で来館できない高齢者に博物館の雰囲気を楽しんでもらおうと企画。幕末の絵師、川原慶賀の「年中行事絵」など昔の長崎に関する資料約二十点を展示したほか、同館研究員が色鮮やかな「長崎版画」の制作を手ほどきした。

会場には約百七十人の施設利用者が訪れ大盛況。幕末の悟真寺（同市曙町）の絵をじっと見詰めていた女性（七）は「十二年前まで三十年以上、お寺の近くに住んでいたのでとても懐かしい。博物館には行きたくても行けない。絵を見られて本当に良かった」と目を潤ませて話した。

同施設によると、高齢者が歴史資料を見ると過去の記憶を呼び覚まし、認知症の予防や改善につながるという。

同館は今後も福祉施設や学校、公民館などの移動展に取り組む意向。大堀哲館長は「今後は地域貢献の分野を広げていく。移動展の要望があればできる限り応えたい」と話した。

2008.12.11　長崎新聞

大正期のひな人形と桃の節句の郷土料理に見入る児童＝長崎市立晴海台小

ひな人形に瞳キラキラ

長崎歴文博〝出前展示〟

長崎市立山一丁目の長崎歴史文化博物館は九日、同市晴海台町の市立晴海台小（馬場信一校長、百六十九人）で、所蔵品を「出前展示」する「れきぶん移動博物館」を実施した。

体が不自由な高齢者や遠隔地在住の子どもなど、来館が難しい人にも楽しんでもらうのが狙い。昨年十二月に長崎市内の高齢者福祉施設で初めて開催し、二回目の今回は小学校で試験的に実施した。

体育館にブースを設け、賀が描いた「年中行事絵」など約二十点を展示。生活を知ってもらおう大正期のひな人形や桃句の郷土料理も並べ、子が目を輝かせて見入いた。

一、二年生は江戸期崎で売買されたクジャど輸入品の値段を当てイズや、歴文博のボラィアが教える折り紙戦。笑顔と歓声がはじ

長崎歴文博は新年降、学校、公民館、福設などで移動博物館をする意向で、開催の相も応じる。

2009.2.10　長崎新聞

4. 貸出資材

教育用資料の貸出しに関する利用規程

1. 利用できる団体
（1）長崎県内の小学校・中学校・高等学校
（2）その他館長が認めた団体等

2. 貸出期間
原則として２週間以内です。ただし館長が特に認めた場合、この限りではありません。

3. 使用料
使用料は無料です。ただし、資料の運搬にかかる費用は利用者側で負担していただきます。

4. 利用方法
（1）ご利用予定日の２週間前までに貸出教材借用申請書にご記入の上、お申し込みください。
（2）輸送方法・日時につきましては担当者とご相談ください。
（3）使用後は速やかに博物館までご返却ください。

5. 遵守事項
（1）資料は利用目的に合わせ、正しく使用してください。
（2）資料の転貸または無断で複製（写真撮影・録画等）しないでください。
（3）万が一、資料を紛失・損傷した場合、直ちに館長に報告し、その指示に従ってください。

6. その他
・写真パネル資料の詳細については、当館ホームページをご覧下さい。
http://www.nmhc..jp/（教育→学校の先生方へ→教材資料の貸出）
・博物館見学の際に、クリップボード、単眼鏡の貸出しも行っています。

平成　　年　　月　　日

貸出教材借用申請書

長崎歴史文化博物館
館長　大堀　哲　様

（申請者）
学校名

住所

代表者名　　印
連絡先　電話（　　）　　－
FAX（　　）　　－
（担当者氏名　　）

下記のとおり、長崎歴史文化博物館の貸出教材を借用したいので申請いたします。

借用希望資料	
借用希望期間	平成　　年　　月　　日　～　平成　　年　　月　　日
借用の目的	
利用の場所	
備　考	

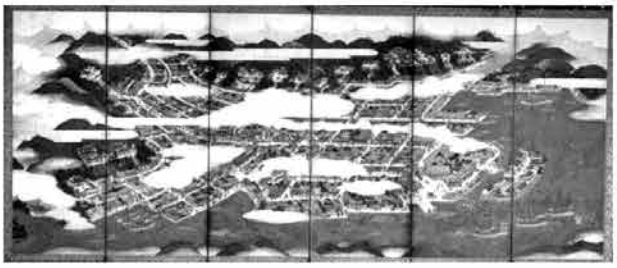
※博物館使用欄

	館　長	統括Ｍｇ	リーダー	教育担当
承認				

貸出日：平成　　年　　月　　日
返却日：平成　　年　　月　　日

貸出教材資料リスト（一部）

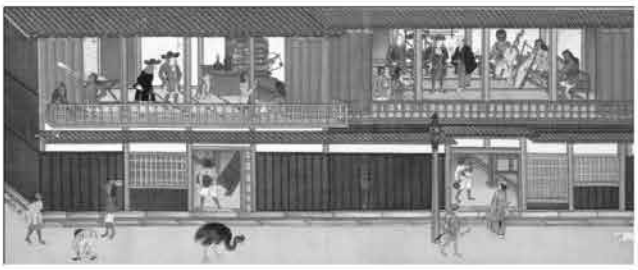
南蛮人来朝之図



寛文長崎図屏風

唐蘭館絵巻

リンデン「日本の思い出」



漢洋長崎居留図

出島図

象図

駱駝図

中国グッズ

韓国グッズ

長崎歴史文化博物館のアウトリーチ活動業務は以下の職員が対応した。
矢野　香織（元教育普及グループ研究員）（平成17年度～平成19年度）
久保　憲司（元教育普及グループ研究員）（平成17年度～平成23年度）
加藤　謙一（元教育普及グループ主任研究員）（平成20年度～平成23年度）
小熊佐智子（元教育普及グループ研究員）（平成24年度～平成26年）
出口　幹子（教育普及グループ主任研究員）（平成17年度～）
一瀬　勇士（教育普及グループ研究員）
（平成20年度～平成24年度、平成26年度～）
古豊裕二朗（教育普及グループ研究員）（平成25年度～）

執筆　竹内　有理（教育普及グループリーダー）
出口　幹子（教育普及グループ主任研究員）
一瀬　勇士（教育普及グループ研究員）
昌子　久志（平戸市立度島小中学校　教諭）
江川　孝博（平戸市立度島小中学校　教諭）
内山　直樹（三和通信長崎株式会社）
岩永　崇史（活水高等学校中学校社会科　教諭）
山田　俊介（佐世保市立江迎小学校　教諭）
福田　浩久（佐世保市立猪調小学校　教諭）
小林　輝子（長与町立長与南小学校　教諭）
田中　英明（佐世保市立日野小学校　教諭）
加藤　尊城（長崎市立川原小学校　教諭）

長崎歴史文化博物館　教育実践報告書
ーアウトリーチ活動ー
2005～2014

発行日　2015年3月31日
発行　長崎歴史文化博物館
〒850-0007 長崎市立山1-1-1
Tel 095-818-8366
印刷　日本紙工印刷株式会社

長崎歴史文化博物館
Nagasaki Museum of History and Culture